

〔資料〕

国立国会
図書館蔵 『錦袋円祖傳』 翻刻と解題

関口 静雄

〔解題〕

国立国会図書館蔵『錦袋円祖傳』(写本。全一冊。本文墨付五十丁)を翻刻紹介する。錦袋円祖は黄檗の了翁道覚(二六三〇—一七〇七)のことをいう。了翁は少年のころ一代藏経収集を立願し、夢中に肥前興福禪寺開山如定禪師から妙薬の製法を伝授され、寛文四年(一六六四)これを万病錦袋円と名付けて江戸上野池之端に薬舗を開いて巨利を得、その蓄財を大藏経購入に充てて寛永寺はじめ二十一ヶ寺に寄進したほか、寛永寺山内に勧学講院を開創し、また慈善救済に精励した一代の傑僧として知られる。しかし了翁の行実を伝える資料は存外少なく、時代は下るが齋藤月岑『江戸名所圖會』第十四冊卷之五玉衡部が了翁の略伝とその行業の大凡を伝えて貴重である。了翁関係資料の整理と集成を試みたい意図もあり、同書天保七年(二八三六)須原屋茂兵衛・同伊八版によって摘録する。

※

錦袋円

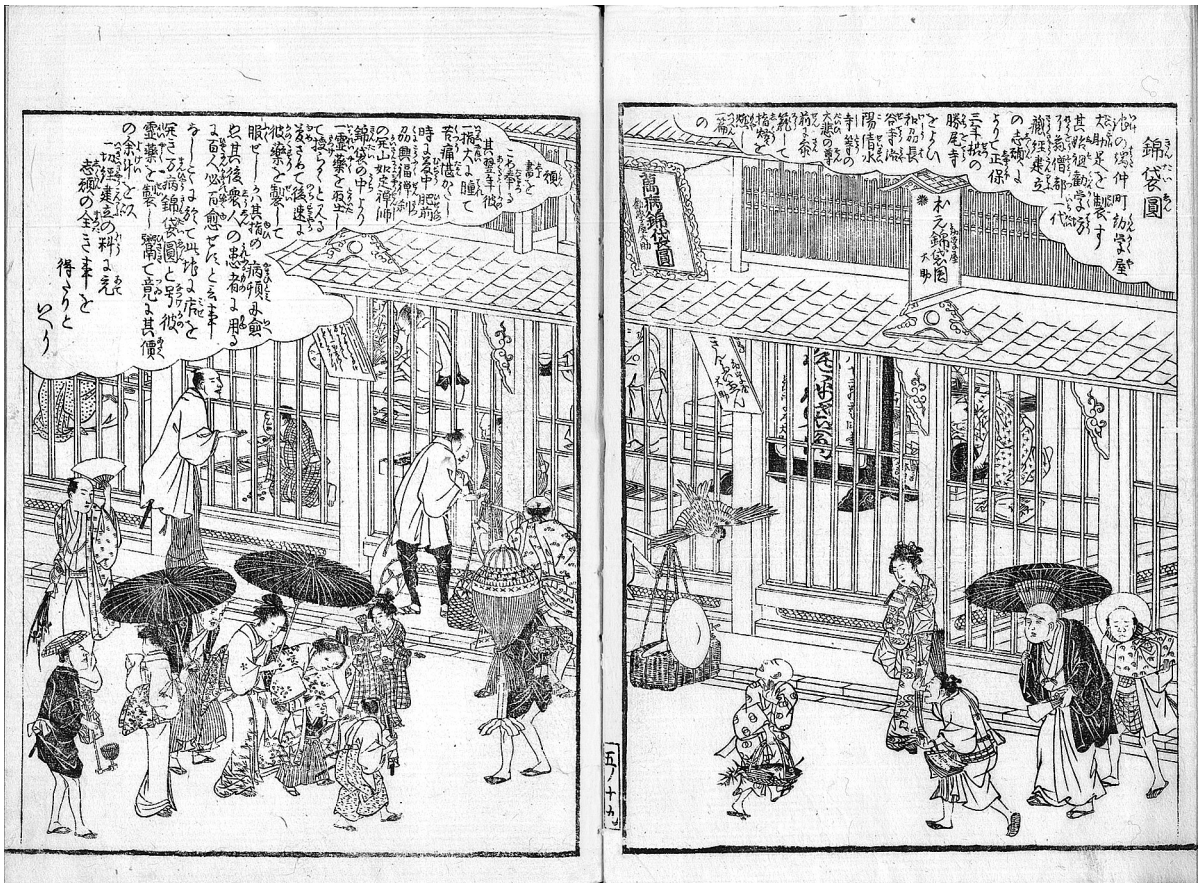
池の端仲町 勧学屋大助是を製す其始祖 勧学坊了翁僧都一代藏経建立の志願によりて正保三年撰の勝尾寺をよひ和苜長谷寺洛陽清水寺等の大悲の尊前に参籠して指燈を燃し一篇の願書をこめ奉る其翌年彼一指大に腫て苦痛堪かたし時に夢中肥前 苜興福禪刹の開山如定禪師錦袋の中より一靈薬を取出して授らんと見る夢さめて後速に彼薬を製して服せしかハ其指の病頓に愈ぬ。其後衆人の患者に用るに百人必 百愈せすと云事なしこゝに於て此地に店を開き万病錦袋圓と号彼靈薬を製し鬻て竟に其價の余計を以一切経建立の料に充志願の全き事を得たりといへり

勸学寮

俗に百軒長屋といふ池の端錦袋圓の元祖了翁僧都天和二年に建立す四方に列るところの寮舎おのゝ五十余間ツ、其數あわせて二百戸とす勸学の僧徒常にこゝに居る 則當山の檀所なり講堂 勸学講院と号す貞享元年に修宮す釋迦如來の像を安して日々に三教の書を講ずる事怠慢なし今ハ觀音を本尊とす經藏 天和四年に建立す中に一代藏経を収め崎陽興福禪刹の開山如定禪師徑山寺より齎來ありし三聖人の古銅像を安す屋上より柱底に至るまで悉く銅葉をもつて包裹す其四方ハ石を疊てこれを築き繞らす又經藏の後左の方に其戒師慈光不味禪師授号師前龍泉禪寺法石大和尚および二親養父母ならひに自得居士の石塔婆を造立す傍に僧都の石像あり同所石壁の外に道行の碑を建たり文は黄檗高泉和尚これを撰す

武州東叡山勸学講院了翁 僧都道行碑記

自古法中大沙門播名布德於天下者豈苟然哉莫不皆是菩薩乘夙願輪而生於世故示行菩薩六度萬行以利天下使天下人咸躋於無上無等至真至聖之域此之妙行實未易以言諭也若今東都勸学講院了翁僧都者豈其人欤自其脱白為沙門便發大乘心行菩薩行精持戒律不失威儀到處參方嘗親近黃檗開山隱老人及吾唐諸知識浪風宿露不以已憂唯憂佛法不大興於世而世之僧俗而不能盡諳佛祖之大法乃乞武陵東叡山勸学講院正中築徑藏以貯三藏聖教其外裹以銅葉以防火患內奉三聖像乃明僧知定公得自雙徑蓋古銅像也藏後之左右立其戒師祝髮師及二親養父自得居士之塔塚其孝忱如



江戸名所圖會

此藏前之西偏有僧都石像乃本院僧衆九百八十人竝都料輩感其功績浩大以示不朽云東西有文庫藏儒老二教及本邦書籍又別設一講堂中奉釋迦如来像日講三教之書俾國人聽者知三聖設教雖少異而利人善世則一矣其前有方丈院之四周有寮舍凡二百間以栖諸方学子其餘庖福之屬悉備焉僧都年老慮後堂宇朽壞預備白金一千二百兩為遞年脩葺之需是則院既不壞而衆可安身學道無風雨之逼無饑凍之憂身安學成則足以爲世福田也於乎今之爲僧也則田我已脫塵出俗圓頂方袍作三界大師之子一餅一盃飄然自在天子莫得而臣王侯莫得而友高則高矣是則未是豈不聞佛事門中不捨一沓乎若捨一沓則不成滿足菩提若僧都者可謂知本矣以敬王公大人與夫四衆莫不知其名重其德嘗於二三十載間以苦行所積淨費盡贖大藏之經散施諸名山大利凡二十一藏矣年來又爲虎關國師重建濟北院今年春因予奉 旨住黃檗又願遞年施資爲脩飭伽藍以及合山子院但有所益之事靡不動行之然奉已至薄每坐卧一小樓未嘗嫌棄食則藜羹粟飯行則竹策蒲鞋以致老病交侵予常勤其少加受用以保道躬僧都終不諾予嘆曰垂老而頭陀不息非佛世之迦葉波乎予與僧都法契已久然未及至其講院今春因詣東都謝恩遂到院相訪觀其措意之妙立沓之嚴世所罕有僧都需爲記因述其大心大行以勸後賢云 告

元祿壬申五季四月穀旦

黃檗山萬福禪寺第五代住持高泉敦敬撰

勸學坊了翁僧都

其俗姓ハ鈴木氏羽笏尾勝郡八幡村の産なり寛永七年庚午三月十八日に生る宿業にやありけん二歳にして悉く親族をうしなひおなしく十八年辛巳十二國龍泉禪寺に入て奴僕となりつるに齋藤自得居士のすゝめによりて難染し僧となりぬこゝにをひて因縁の不可思議なる事を發明せりおなしく廿年歳ミつから思唯すらくそれ一切藏經ハ如来の肝膽にして人天の眼目なり我心肝を碎誓て一代藏經を建立せんといつて正保元年甲申歳十五鎮守八幡宮に詣し至心に志願の成就を祈りたてまつり夫より諸國を經歷しあまねく高德の師に謁してかかしこに掛錫す承應四年肥前笏興福禪刹の開山如定禪師の示現に

よりにて錦袋圓の靈方を製し市店をひらきてこれを鬻ぎ六年を経て其價の余許黄金三千兩を得たりこゝにをひて寛文十年庚戌歲四十一忍ハすの池の中島にして地を賜ひあらたに一島を築き一字を建はしめて藏經全部安置する事を得たりよつて其頃報恩のため錦袋圓を四十二万人に施す天和二年歲五又東叡山の中にして四方五十余間の地を賜ひ勸学寮を建立す院宇三蓋四方二百戸の寮舎を設く又二字の文庫を建儒老二教をよひ倭漢の群籍を收藏する事すへて三万余卷なりすなはち忍はすの中嶋より藏經をうつして經藏を建てこれを収むこゝにいたりて志願圓満す日光御門王其功の大なるを御感ありて学頭凌雲院を建て般若心經を講説開白せしめたもふ又貞享二年高野山光墓院に一藏庫を置仁和御門主御感賞ありて勸学坊権大僧都法印に任せらる以上了翁傳の要をつむて

※

右の『江戸名所圖會』所載記事を併せみると、万病錦袋円は池之端仲町勸学屋大助の製するもので、その始祖勸学坊了翁道寛は羽州尾勝郡八幡村(秋田県湯沢市八幡)の人で、鈴木氏。寛永七年(一六三〇)三月十八日に生まれ、二歳にして親族を失い、十二歳のとき同国龍泉禅寺の奴僕となり、齋藤自得なる人物の勧めによって僧となった。十四歳の折り一代藏経建立を志願し、以来諸国の高德に謁し、隠元隆琦また黄檗の知識に親近した。寛文三年(一六六三)撰勝尾寺・和州長谷寺・洛陽清水寺の観音大悲に参籠して指燈を燃じ一代藏経建立の願書を奉った。しかし指痛に堪えがたかった折りの翌四年、夢中に肥前興福禅寺開山如定禅師(一五九七—一六五七)から靈藥の製法を伝授され、服用すると指痛は頓愈した。この靈藥を万病錦袋円と名付け、江戸上野池之端に薬舗を開くと六年にして黄金三千兩を蓄財した。これを資金に寛文十年(一六七〇)四十一歳のとき不忍池中に小島を築き一字を建てて藏経全部を安置するを得、志願成就の報恩として錦袋円を四十二万人に施した。天和二年(一六八二)五十三歳のとき東叡山内に四方五十四間の地を賜ひ勸学講院を開創した。俗に百軒長屋と称される当山の檀所たる勸学寮は四方各五十余間ずつ二百戸の僧徒常住の寮舎で、二字の文庫を建て儒老二教および和漢の群籍三万余卷を收藏し、

勸学講院の講堂には本尊釈迦如来像(後に観音像)を安置して日々に儒仏道三教の書を怠慢なく講じた。講院正中には火難を怖れ外を銅葉で裏んだ經藏を設けて黙子如定禅師請来の釈迦・孔子・老子の三聖古銅像を安置し、不忍池の中島から移した経律論の三藏聖教を収め、堂後には戒師慈光不昧禅師・祝髮師前龍泉禅寺法石大和尚・二親・養父母・齋藤自得居士の石塔婆を建てた。ここに了翁の志願はさらに円満したが、その功に日光御門主は御感あって学頭凌雲院をして般若心經を講説開白せしめ、また貞享二年(一六八五)高野山光台院に一藏庫を寄進すると仁和御門主御感賞あって勸学坊権大僧都法印に任せられた。これははじめ了翁は錦袋円販売の淨貨をもって大藏經を贖い諸名山・大刹に二十一藏を寄進し、また洛東南禅寺の虎関師鍊の遺徳を讃してその济北院を重建するなどした。しかし自身は粗衣粗食に甘んじ仏世の迦葉尊者にも喩えられるという。なお勸学講院經藏の蔵西に祀られる了翁僧都石像は勸学寮の僧衆九八〇人と大工たちが合力出資して建てた寿像で、石壁の外の「武州東叡山勸学講院了翁 僧都道行碑記」の碑文は、了翁の需によって黄檗山萬福寺五世高泉性敦(一六三三—一六九五)が元禄五年(一六九二)四月に撰したものである。

※

万病錦袋円は『江戸名所圖會』に伝えるように江戸上野池之端仲町の薬舗勸学屋大助の製したもので、その開店を嗣法元善・元見編『黄檗天眞院了翁覺禪師紀年録』は寛文五年(一六六五)とするが、『江戸名所圖會』の「市店をひらきてこれを鬻ぎ六年を経て其價の余許黄金三千兩を得たり」とある記述を重んじれば、その前年の寛文四年には始業していたものと思われる。勸学屋の店頭光景を描いた長谷川雪旦の挿絵はその繁盛ぶりをよく伝えており、画中の説明書きは越中の反魂丹・伊勢の万金丹と並んで全国に知られた江戸の錦袋円の由来と独特の商法を略述している。しかし挿絵中には「萬病錦袋圓勸学屋大助」「さんたいゑん大助」「本元錦袋圓大助」の看板が見え、「本元」の二字はいかにもその偽藥の存在を暗示し、じじつ巻六開陽部「金龍山淺草寺」の挿絵には二十軒茶屋の中に「錦袋圓」の文字が見える。偽藥の存在は齋藤月岑撰『武江年表』天和二年「此年間記事」一条(今井金吾編『定本武江年表』第一卷所載影)にも、

○池乃端錦袋圓行る

勸学院の了翁僧都ハ羽笏の産なり幼方仏業に歸し一代藏經を聚集せん事を發起し難行を修しけるか寛文二年に至り去年手燈を炷せし一指痛事甚ししかるに夢中肥前興福寺の開山如定禪師より藥法を授り頓に平癒を得たり錦の袋の内より取出して授られたりとて錦袋圓と号す後東えい山の麓に表七間裏行廿二間の市店をひらき此藥をひさきて志願成就の料に充此藥神効ある事遠近に響渡る是に隨て江戸并近在にても似せ藥を調合して賣るもの幾人といふ事をしらず美童を撰て五十人余を養ひ市中を徘徊して賣らしむ或人これを了翁に告て云是を防ずんハ足下の藥ハ行く廢るへし若廢たらハ大願かならず破んと答云寸志忝しさりながら某大願の本意ハ諸人を助け救んか為なり若彼輩藥を賣て妻子の便りともならハ本意の一ツなりと或人又曰若彼か藥人に崇あらハ其科は足下に歸すへし答曰 日月ハ未地に落す仰て天に任すと問答數回にして互いに大笑して分れしとそ

とあって、江戸および近在で似せ藥を調合して賣る者が多數あり、中には美童五十人余を市中に徘徊させて賣る者もいたが、了翁は「某大願の本意ハ諸人を助け救んか為なり」と偽藥の存在を平然と容認していたことが知られる。

石川流舟撰『正直咄大鑑』赤(元禄七年(一六九四)九月、万屋清兵衛板)には、

第五 萬病錦袋圓

下谷池したやいけのはたにくわんがくや大助といふてあまねく江戸中にかくれなき藥店すりだなありもおもてに金銀きんぎょのちりばめ瑠璃るりのつぼ珊瑚さんごのゑた。琥珀こはくのたい。めなふのいし。すいしやうのかゞゞみかざりたてたる鈍子のしとねのうへにハ。かうらいなんきんのつぼをならべにしき金らんをもつてくちを包つひ老間のきんかんばんに萬病錦袋圓まんびやうきんたいえんとかき付て諸人は是をもとめてくわいちうするほどにうりかふにいとまなし折節しさいらしきろう人きたりてかんばんにふしんしけるハそれやまひハ四百四病あるに此錦袋圓このきんたいえんいかにしてか万病まんびやうによしとハいひたまふぞ。こざかしきわかいもの出て四百四病と御さだめハさる事なれども千万億せんまんをくのやまひあ

れバとて。にんくにもツやまひにまづせんきといふわづらひあり物もの毎ごとにこうまんのころあれバかならずまんきといふわづらひいづる。貴様方きさまがたのようなる御牽人ごけんじん様もひよつと臆病おそひやうと申やまいでたがるものじやされば千万億せんまんをくのやまひなしとハいわれますまいといふた扱あつかもりかふなものゝ

とあって、それが開店当時からかどうか不明だが、豪華な店内調度と小利口な店員の存在を伝えており、享保ころのはやり歌集『いろざともつともぶし』(花咲一男編「川柳江戸名物図説」所載、昭和(和五十二年(一九七六)六月、三樹書房)の「うらのさんしよの木」にも、

やよひ、山ぶき、うへのゝさくら、いけのはたにハくわんがくやの大すけ、なだいのきんたんゑんハ大人、せう人もふすにおよばず、とりわけきめうをしよこなめろ、ゑいや、このはやぎつけ、ほんにめいよなおくすりじや、しよがいの

と歌われていて、池之端勸学院大助の錦袋圓は、江戸で広く知られた名代なしろの名薬だった。また川柳にも、

中将姫きんたんゑんがあたりあたりに居い (錦江明三梅2)

つみなくてきんたんゑんのわかいもの (天三智2)

古郷へハ錦袋圓をみやげ也 (柳四四33オ)

池の端男斗りの惣籬 (樽百四八2オ)

素見なし錦袋圓の格子先 (樽百四24ウ)

など錦袋圓と勸学院を詠んだものは多く、とくに江戸っ子は江戸訛で「きんたんゑん」と呼んで親しんだ。十返舎一九の『道中膝栗毛』第三編上「小夜の中山・日坂峠」段(享和四年(一八〇四)榮昌堂藏版に據る)には、腹痛の弥二が服用している。

弥二へエ、ばかアいやんな。腹はらがいたくてならぬ (中略)

北八へハ、まちなよ。イヤもふない。イヤこゝに錦袋圓きんたいえんがある。

ソレよしか

弥二へからかミのかけでまつくらだつゝミ紙をあけてくすりをとり出して

ガリくく。ア、又何をかくハしやアがつた。ベック

北八へドレ見せな。イヤア是ハ観音さまだ

弥二へほんに観音さまのあたまたア。かミくだいてしまつたハ、、、

と滑稽問答が記されており、また安永頃（一七七二―一七八〇）の『當世爰かしこ』（花咲一男 編前掲書）に「勸学院の雀はもうぎふをさへづり、勸学屋は銅佛をほどこし」とあるように、錦袋圓の包紙には金属製の小観音が入っていた。錦袋圓は大粒の丸葉で猿胞・竜腦・麝香・肉桂・茶茗・甘草などを主成分とし、止血・防腐などに効能がある収斂薬であったといひ、元禄十五年（二七〇二）四月の『俳諧世登利富根』序（花咲一男 編前掲書）に「勸学屋が辺の雀酢ハ自ラ錦袋圓の匂い有り」とあるから香気の強いものであったらしい。

※

勸学屋は関東大震災前まであったという。川瀬信雄氏『図書館の開創者 名僧・了翁禅師伝』（平成二年（一九九〇）に、並に社会事業家名）に、

私は、恩師の今沢慈海先生から、先生が震災前にこの店を訪ずれ、錦袋圓を購入した話を聞いている。店は宝丹薬舗の隣りにあって、水戸黄門の真蹟であるという「万病錦袋圓」の看板が掲げてあり、看板の台座の左甚五郎作と伝えられる龍の眼には、昔不忍池に鳥が飛来したとして、釘が打ってあるのを見たということである。

と伝えている。今沢慈海氏自身も『了翁禅師小傳』（昭和三十九年（一九六四）九月）に「宝丹薬舗に隣る錦袋圓本舗を訪うて（中略）昔のものと品質は異なっているそうであるが、今なお宇治の黄檗山に納めているという『錦袋圓』（丸葉）を記念に購っている」と記している。寶丹は延宝八年（一六八〇）創業という守田治兵衛商店の九代目治兵衛が文久二年（一八六二）オランダ人医学者A・F・ボードウィン博士の処方からヒントを得て製剤販売したもので、とくに虎列刺の予防薬として重宝され、明治四年（一八七二）には前年公布された新政府による売薬取締規制の官許第一号公認薬として許可され隆盛を極めた。守田治兵衛商店守田寶丹は今も創業地の池之端仲町（台東区上野 丁目）にあって、これに隣りして錦袋圓の勸学屋は大正十

二年（一九一三）九月一日の関東大震災前まで営業していたのである。しかしそこは勸学屋の創業地ではなかった。それについて現在文京区本郷七丁目に所在の琳琅閣書店第二代斎藤兼蔵氏が「初代琳琅閣主人とその周辺」（反町茂雄編『紙魚の昔語り 明治大正篇』所収 平成二年（一九九〇）一月、八木書店）に「池の端錦袋圓跡へ移る」として、

仲町十一番地へ移って後暫くしてまた、二十二番地に池の端で有名な錦袋圓という薬屋の跡が売物に出ている、守田宝丹が持っておりまして。「江戸名所図会」にも出ている位の大きな家で、店主蔵の間口が六間程ありました。なんでも、この家の娘が裏の弁天様の池へ身投げして池の主になったとか、また、掻い堀の時にその主が印旛沼に引越したとかいう因縁付きの家で、空屋でしたが誰も買ひ手が無いのを、先代がこれを買ひまして十一番地から引き移りましたのです。

と語り継いでいる。この話は明治十年（一八七七）頃のものであるが、左掲する「加減錦袋圓」の広告札には「東京下谷區池ノ端仲町十九番地ノ錦袋圓本舗勸學寮十六世 芝大助謹製」とあるから、創業地を離れ守田寶丹に

登録 萬病 加減 錦袋圓

登録 同類似ノ藥夥多ク存之ヲ間勸學寮ノ箱歸也

登録 商標御認ノ上御購ホアラシトテ伏テ奉希上キ也

登録 學寮ノ良劑、寛文年中ニ發賣セリ藥功 公大無愛ナルハ普ク世人ノ認信スル處ナリ

登録 本店直接行商人ハ總テ東京府麻呂街 印旛押捺 無札持券侍價宜敷ニ發賣度也

登録 萬病 加減 錦袋圓

登録 安寧散

登録 錦袋水

登録 蒼龍丹

登録 錦袋圓 勸學寮 十六世 芝大助謹製

隣りしてから出されたものかと思われる。また明治十年四月に医学雑誌「醫範新説」を創刊した櫻南社社長芝大助はあるいは十六世であろうか。「醫範新説」によると櫻南社は東京第四大区六小區池之端仲町廿三番地の錦袋圓勸學寮内にあった。また明治四十年（一九〇七）七月、了翁二百年忌を記念して『了翁禪師略傳』を出した芝直翁は当時錦袋圓勸學屋の当主だった。

なお国会図書館蔵『錦袋円祖傳』に「東〇山ノ麓紫荷ノ側ラニ市店ヲ仮借シ阿姪ヲ誡メ勸メテ賣客トノ某乙ハ賣主トナリヌ」とあり、島田蕃根旧蔵秋田県立公文書館蔵『了翁祖休禪師行業記』に「阿姪ヲ誡メ勸メテ賣客トノ」、また同館蔵『黄檗天眞院了翁覺禪師紀年録』にも「使_シ俗姪某_ヲ賣_レ之_ヲ」とあって、了翁は寛文四年（一六六四）池之端に薬舗を開いた時その姪を店主にしたと伝えている。しかし研究者間には屋号であるはずの勸學屋大助の「大助」に曳かれたものか「姪」を「甥」と解する向きが少なくない。一考を要しよう。

※

了翁道覚の行実を伝える基本資料には次のものがある。

1 『了翁自伝』

写本一冊。早稲田大学図書館蔵。墨付四十九丁。半丁十行、一行二十字。奥書に「貞享二年乙丑之冬」とある。書名は後人が付したものと見える。

2 『錦袋円祖傳』

写本一冊。国立国会図書館蔵。墨付五十丁。半丁十行、一行二十字。奥書に「貞享二年乙丑之冬」とある。書名は後人が付したものと見える。

3 『了翁祖休禪師行業記』

貞享二年冬、小弟了源了觀共輯。諸伝本に内題「收納一代并寶儒老倭漢群書武州諸國二十一庫本末縁起并序」がほぼ共通するので、これが本来の書名と思われる。以下に伝本を記す。

①秋田県公文書館蔵『了翁祖休禪師行業記』（写本一冊。島田蕃根旧蔵）。

外題「東叡山勸學講院開祖了翁祖休禪師行業記」、内題「收納一代寶典并儒老倭漢群書武州諸國二十一庫本末縁起并序」。卷末識語に

佛圀禪師行業記一冊縁島田蕃根翁
舊藏翁曾贈之于池端斎藤氏以斎
藤住于錦袋圓舊地也予與翁及斎
藤皆有舊因是書今歸我々轉
藏于秋田圖書館以不空翁及斎藤
之志也 大正四年正月

長井江沅 印 印

とある。江沅の寸識をわずかな知見を加えて斟酌すれば、佛圀禪師行業記一冊の縁由は、この書はもと三經學人島田蕃根翁の旧蔵書であって、翁はかつてこれを池之端の斎藤氏へ贈られたのである。斎藤氏は池之端仲町二十二番地の錦袋圓勸學屋の旧地を買い取って、そこに琳琅閣を開いた古書肆であった。わたしと蕃根翁および斎藤氏はともにこの書に旧因があり、この書が今わたしの所蔵に帰したのもそれであろう。わたしはこの書を秋田図書館に転蔵するが、それは書籍に対する蕃根翁と斎藤氏の志を空しくするものではなからう、との意に解せられる。島田蕃根氏は周防の人。役藍泉の孫で周防徳山天台修験道教学院住職で、維新後は内務省社寺局に出仕した。縮刷大蔵經の刊行で知られ、琳琅閣とは親しい交流があった。斎藤氏は琳琅閣初代兼蔵。古書肆として聖書に通暁し、バイブルと敬称された。江沅は經學者で『江氏周易上下経時義』（大正七年（一九一九）・長井早苗刊）、『江氏自誌綜』（大正六年（一九一九）・長井早苗刊）、『江氏自誌綜』（一七）・葉文堂）等の著作がある。なお蕃根旧蔵『東叡山勸學講院開祖了翁祖休禪師行業記』は渡辺麻里子氏『了翁祖休禪師行業記』について「（付・翻刻）秋田県公文書館蔵『了翁祖休禪師行業記』（『論叢アジアの文化と思想』第十四号所収。二〇〇五年十二月、アジアの文化と思想の会）に解題と翻刻がある。

②祥光山龍雲寺蔵『收納一代寶典并儒老倭漢群書武州二十一庫本末縁起』（写本一冊）。未見。上掲渡辺麻里子氏『了翁祖休禪師行業記』について「内題「收納一代寶典并儒老和漢群書武州二十一庫本末縁起并序」。卷末識語によると昭和十年十二月に黄檗堂悦心が徳良に東京都三鷹市下連雀の黄檗宗靈泉山禅林寺蔵本を書写させたもので、禅林寺本は「秋田本と本文の系統の異なる伝本」という。なお黄檗宗祥光山龍雲寺は愛知県

常滑市神明町に所在。

⑧鈴木吉祐編『勤學講院了翁祖休禪師業記』(謄写版刷一冊)。

卷末識語によると、昭和十三年(一九三八)盛夏に鈴木氏が秋田県公文書館蔵島田蕃根旧蔵写本『了翁祖休禪師業記』を謄写版刷に付したものの鈴木氏はこれと、黄檗山万福寺天真院所蔵『了翁覺禪師紀年録』と『了翁禪師開堂録』の板木を借り受け自刷りし、右三書を一帙に収めたものを三十九部製したという。なお鈴木氏は秋田の人。『大正の秋田附商工人名録』(昭和六年(一九三二)一月、大正堂書店)、『秋田県人雜誌』(昭和十三年七月、大正堂書店)、『了翁禪師の生涯と其事蹟』(和十二年九月号、昭和三十二年七月)の著書がある。

⑨期成会委員学校準備掛編『了翁禪師伝』(活版刷一冊)。

未見。上掲渡辺麻里子氏『了翁祖休禪師業記』について「によって記す。外題「了翁禪師伝」、内題「收納一代宝典並儒老和漢群書武州諸国廿一庫本末縁起」。本文四十二頁。一頁十六行、一行三十二字。明治三十年(一八九七)八月、期成会委員学覺準備係誌という識語に「原本勸学寮ノ旧蔵ニシテ」今又叻ニ一字ヲ改メズ」などある由。渡辺氏は勸学寮は上野寛永寺のそれをいうのであらうとされる。

4 『黄檗天真院了翁覺禪師紀年録』(木版一冊)。

仁峰元善編。元善は了翁の法嗣で天真院第二代住持。上述のように、この書は鈴木吉祐氏が昭和十三年盛夏に黄檗山万福寺天真院蔵『了翁覺禪師紀年録』板木を自刷されている。外題『黄檗天真院了翁覺禪師紀年録』外題『天真了翁禪師紀年録』。元禄十三年正月黄檗第六代千呆性俊序、元禄十四年九月道香雪村序、宝永四年夏黄檗第七代宗悦道山序、元禄十三年正月跋、宝永四年五月元善元見識。本文二十四丁、半丁十行、一行二十字。了翁の出生から七十八歳遷化までを記す。渡辺麻里子氏『了翁祖休禪師業記』について「によると版本に別種が存する。外題・内題とも『黄檗天真院了翁覺禪師紀年録』、柱題『了翁覺禪師紀年録』。千呆性俊序、元禄十四年九月道香雪村序、宝永四年夏黄檗第七代宗悦道山序があり、本文記述は了翁の出生から七十歳までを記すという。

5 『佛國了翁禪師開堂語録』(木版一冊)。

仁峰元善編。この書は鈴木吉祐氏が昭和十三年盛夏に黄檗山万福寺天

真院蔵『了翁禪開堂録』板木を自刷されている。外題『佛國了翁禪師開堂語録』、外題『天真了翁禪師語録』、内題『佛國了翁禪師語録』。

元禄十五年仲秋正月仁善序、獨湛跋千呆性俊元禄十四年仲秋跋、宝永四年夏黄檗第七代宗悦道山序、元禄十三年正月跋、宝永四年五月元善元見識。本文十八丁、半丁九行、一行十八字。鈴木氏は奥識語に『佛國了翁和尚語録』と『了翁禪師開堂語録』とは、同一の内容である」と注記されている。

6 『武州東叡山勸學講院了翁 僧都道行碑記』(石造碑文)。

台東区上野桜木東叡山寛永寺根本中堂境内所在。石碑は元禄五年四月門弟等が建立。隣りして了翁寿像がある。碑文は元禄五年四月黄檗山萬福禪寺第五代住持高泉敦敬撰。『江戸名所圖會』第十四冊卷之五玉衡部に所載。碑文の注釈書に十老縁了房撰『高泉禪師著僧都了翁碑文文思淵註』(文化八年(一八一四)、濱名徳永氏『武州東叡山勸學講院了翁 僧都道行碑記』(東叡山勸學寮蔵版)、『平成一三年(二〇〇二)十月、觀音教寺)がある。右濱名氏論考によると文思淵(安政四年(一八五七)十月、觀音教寺)は勸学寮十老職を退院後に天應山觀音教寺四十四世を継いでいる。

7 『了翁大僧都行業碑銘拜序』(石造碑文)。

黄檗山萬福寺天真院境内所在(未見)。元禄六年(一六九三)三月、黄檗



了翁肖像

『高泉禪師著僧都了翁碑文文思淵註』口絵所載。(濱名徳永氏提供)

第五代高泉性敦撰文。川瀬信雄氏『〔図書館の開創者並に社会事業家名僧・了翁禪師伝〕（平成一九九〇）七」に翻刻と注解がある。それによって記す。碑文末に、
〔女性仏教社〕

告

元禄癸酉六季活洗月穀旦

黄檗第五代住持曇華道人敦高泉撰文

嗣法徒元喜 暨門弟子 元妙 元旨 元見 元瑞 元□ 元寿

元修 元忠 元到

とあって、石碑は了翁嗣法の仁峰元善（元喜は元善の誤植であろう）はじめ門弟が合力して建立したと知れる。なお天真院は元禄七年夏、了翁が自房として建立したもの。石碑の裏面に雲宗和尚撰『天真開基了翁覺禪師碑陰』が刻されている。

8 『天真開基了翁覺禪師碑陰』（石造碑文）。

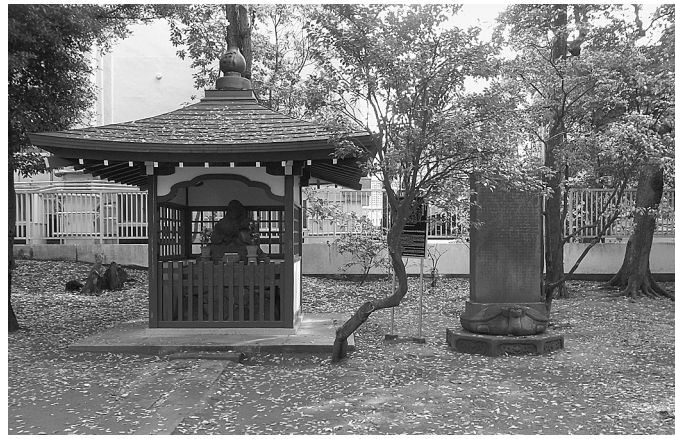
黄檗山萬福寺天真院境内所在（未見）。元禄九年（二六九六）四月八日、黄檗山萬福寺宝蔵院雲宗元章撰文。川瀬信雄氏『〔図書館の開創者並に社会事業家名僧・了翁禪師伝〕に翻刻と注解がある。それによって記す。碑文末に、

元禄丙子九季仏誕日 宝蔵院雲宗敬題

とある。雲宗元章は一切経刻蔵で知られる鉄眼道光の門弟。生没不明。



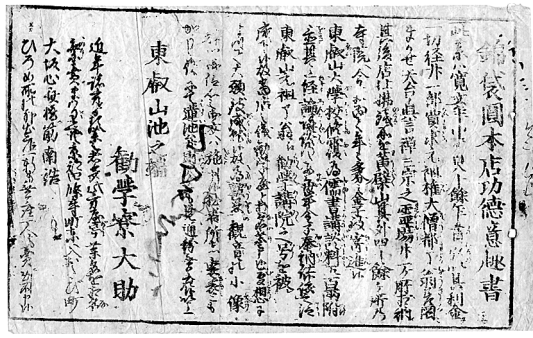
了翁寿像
寛永寺根本中堂境内



寛永寺根本中堂境内 左: 了翁寿像 右: 道行碑

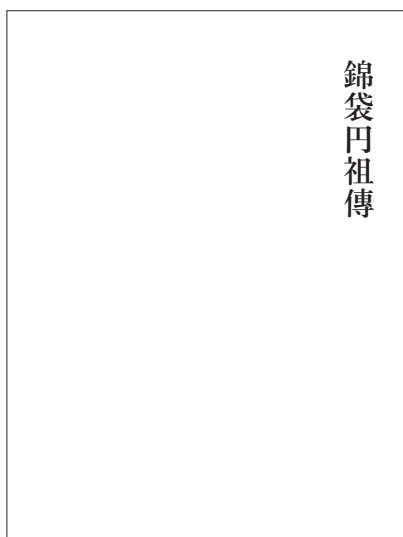


道行碑（部分）



錦袋圓本店功德意趣書

錦袋円祖傳



表紙見返

一某乙ハ本朝東山道羽劬仙北尾勝郡八幡村野民ノ子也寛永七年庚午三月十八日午時生ル如何ナル夙世ノ業因ニカ有ケン不幸ナル事タトヘテ更ニイハン方ナシ既ニ二歳ニシテ慈母ニハナル父養育スルニ力ナクテ同郡高屋敷村ニ高橋氏某ト云テ富栄ノ人アリケル縁ヲ其モトニ求テ我等ヲ遣シテ子トナシヨハレリ其年不凶ニ養母世ヲサリ続テ又養父ヲ喪シ又程モナク姊二人マテ早世セリ此ヨリ家内日々ニ衰ヘ財宝年々ニ尽テ我等モタ、スムヘキ便リヲ

01オ

失フ年齢既ニ七歳ニ及ヘリ時ニ又実父鈴木氏カ家ニ帰ルトイヘ氏本ヨリ貧乏ナレハ日月送リ難シ爰ニ同姓伯父カ家ニ立寄り漸ク飢渴ヲ救レ涸魚ノ水ヲ得タル心地シケル処ニ伯父伯母又続テ相共ニ卒セリ齡ハヤ八歳ニナリタレハ物ノ道理ヲワキマヘ事ノ是非ヲモ心ニ覺知シテ実ニ如此ナル因果業報ノ迫メ未ルコトモ世間ニハ有ルモノカト思イ取ルニ随テ魂モ消入感涙偏ヘニ袖ヲシホレリ路頭ニ身ヲ曝スヘキ様モナク又父カ本ノ家ニ立帰リヌ近郷遠村諸

01ウ

人舉ツテ云ケルハ此子ハ実ニ世上無類ノ悪子ナリ彼カ至ル処ロノ家トシテ亡セスト云コトナシ各必ス養テ子トスルコトナカレト諸人ノ心皆一同ニ我等カ影ヲタニモ見ルコトヲウトミ利那モ身ヲ隠スヘキ処ナシ悲ミノアマリ聊カ好ミ有ケル真言家ノ師ヲ憑ミ偏ニ慈悲ヲ仰テ十一歳マテノ露命ヲ助ケラル

02オ

如其寺ヲ憑ミ剃髮出家セシメハ先ツ現在ノ身根ヲ養ヒタマミ經文ノ一句ヲモ誦誦セハ過去時未ノ罪障ヲモ拔除シツヘシ早ク此一道ニ入シムヘシトテ評談一決シテ一家相聚リテ出家ヲ勸メラル然レ氏某乙旧業未尽因縁不熟ノ故ニヤ離俗出塵ノ志一点モキサ、ス堅ク意見ニ背却シケレハ一家弥嘖恚ヲ起シ方便ヲ失イ畢竟此身ヲ以路上ニ横死ストイフ氏如何トモセシ方ナシトソ責ラレケル実父泣々同国岩井河曹洞派下龍泉禪寺ニタヨリテ預メ紀年ヲ限り

02ウ

米子三斛二斗ニ一身ヲ沽却セシメテ寺院ノ奴僕トナシ畢レリ然ル処ニ寺院ノ近鄰ニ齊藤氏某ト云テ賀州ノ浪客一人アリ常々寺ニ未テ篤ク師家ノ教誨ヲ蒙リ値遇甚タ不淺有時師家ニ告訴テ云レケルハ冀クハ此奴ヲハ披削セシメテ仏弟子トナシ玉ヘト此事數回ニ及テ休マスト云ヘ氏師家ツイニ許容ナシ或時師家ノ申サレケルハ浪客ノ懇切彼ノ奴ト実ニ縁有哉早く求メニ應スヘケレト此奴前々一家ノ勸ニモ違逆シ身ノ困窮モ未タ骨ニ徹セス出家ノ道不輕

03オ

ラ是故ニ容易ニ肯カタシト然リトイヘ氏浪客ノ懇志倍ス厚ク某乙カ為ニ別ニ一僕ヲ求テ寺ニ入置和尚ニ向テ又申サレケルハ切願スラクハ此僕ニカヘテ彼奴ヲハ仏衣ヲ許シ玉ヘ我彼レヲ悲ミ思フ「実子ニ異ナラスト師家深心ニ悃求ヲ感ノ立トコロニ仏奴トナシ玉ヘリ某乙モ以前ハ一念発起モナカリケレ氏至此忽然トノ納得ス竊ニカヘリミレハ時節到未因縁不可思議ナルモノカナ至于今追憶スレハ彼齊藤氏ハ某乙一世ノ善知識ニシテ報恩ナニヲ以テカ

03
ウ

尽ス「ヲ得テンヤ難染ノ三年ヲ經歷シテ昼夜師家ニ巾櫛ノ經卷ヲ講習シ宗風ヲ窺見シ法門ノ格法ヲ稽古ス

一十四歳奥州平泉ニ昔シ秀衡入道建立セシ光堂アリ其内ニ納メ置クトコロノ紺紙金泥一代蔵經何ノ時代ニカ紛失墜乱シテ奥羽国中ノ寺社民屋ニ或ハ二三卷六七軸散在シケルヲ某乙適見之心底ニ悼ミ思フハ彼入道ノ家ハ三代武威ヲ東夷ニ振フテ天下ニ敵ナキカ如ク栄花家ヲ耀カシ種々ノ珍宝库蔵ニ貯ヘ充テリ殊ニ秀衡

04
オ

ハ金銀珠玉ヲチリハメテ此光堂ヲ起立シ南都ノ仏師ヲハルメ招キ下シ数々ノ佛像ヲアツラヘ作り深ク三審ニ帰依シ奉ル就中三部ノ藏經ハ実ニ善尽シ美尽セリ仄カニ承ル一句ノ經文ニ縁ヲ結フコトハ無数劫ノ中ニモ甚タ希有ナルモノト然ルニ世代リ時移リテ古ノ栄跡今又其面影タニナシ殊更此金經ノ方々ニ紛乱スル「悲テモアマリ有歎テモアマリ有未劫世中ニハ經卷ヲ以テ本師生身仏トスヘシト遺誠明ニ有之モノト耳ニモ常ニ觸ヲキケル伏願クハ身

04
ウ

ヲ摧キ骨ヲ粉ニシテモアハレ此一巻ヲ本町ニ返シヲカマク思フトイヘ氏心ノミ苦ンテ力不足日月種々ニ辛苦シ千々ニ思慮ヲ廻シ漸ク六卷ヲ搜リ得タリ是偏ニ塵中ニ金玉ヲ拾ヒ得タルカ如ク歡喜肝ニ銘シテ即チ其沙門ヲ憑ンテ本堂ニ返シ納メヌ是ヤ因縁トナリケン忽然トノ誓願スラクハ自ら身ヲ願レハ生稟極メテ魯鈍ニ才識缺テナク智慧最モ味劣ナリ如此拙キ業生ニシテハ生死事大ノ関頭ヲ出得シ自利々佗ノ大道ヲ成就セン「実ニ難カルヘシ然リ

05
オ

トイヘ氏不思議ノ縁ニヨリ染衣持鉢ノ身トナリ有難クモ三審ノ数ニ列リヌ若此生無益ニ過ナハ又何ノ生ヲカ憑ン責テハ一分ノ善根ヲ植テ自己親族ヨリ有縁ノ国土無縁ノ群生ノ菩提ノ種トモナシ得テン善根無量ノ中ニ何レカ其功德最勝ナルヘキ夫經卷ハ如未ノ肝膽人天ノ眼目末世ノ道俗ハ此ニヨリテ刀山劔樹ノ大嶮難ヲ出八寒八熱ノ大苦患ヲモ遁ル、大方便トス南無三世十方ノ諸仏諸祖威徳円満ノ護法善神明カニ聞凸シ玉ヘ某乙今心肝ヲ碎キテ謹テ

05
ウ

誓願ヲ起ス某乙一世ノ際ニ一代蔵經ヲ聚集セント各々ノ大護念力ヲ以テ一度此大功ヲ遂サセ玉ヘ若夙福少シテ神驗モ及スンハ束テ大般若經六百卷ヲ書写安置セン倍ス乞願クハ加被ヲ垂レ玉ヘ三世ノ諸仏ハ般若ニ依ルトイヘリ十八大空ハ此部ヨリ出ツ般若ヲ除テハ我道爭テカ成セン一世半滿一部モ大凡此門ヨリ出ツ苦海ノ宝筏冥衢ノ明炬トハ只此ノ般若ヲ指スカ

06
オ

一十五歳秋八月十五日邑上ノ鎮守八幡大神宮ニ

參詣シ至心帰命ノ誓願成就ヲ祈リ奉ル若今生
ニ果シ遂スンハ尽未未際ニ一度此功業ヲ終サ
セタマヘト即チ社頭風勝ノ為ニ勞劬シテ苗杉
五百八十本ヲ求テ此ヲ植ヲキシカハ今現前ニ
大木トナリ又茲歳ヨリ正保丁亥ニ至ルマテ四
年ノ間ハ当処ヲ東奔西走シテ心祈円成ノ行業
ヲ励マス八幡大菩薩ハ三宝擁護ノ威徳万神ニ
勝レ玉ヘハ弥信心ヲ傾ケ或時発起シテ刃ノ時
詣テヲ企初テ二十一夜ヲ相重ネタリ途中社頭
ニ於テ種々ノ神變箇々ノ現瑞筆端ニ露スヘキ

06
ウ

一八真実恐アリコノ故ニ今此ニ不載
一十八歳傳聞ク大聖文殊大菩薩ハ七仏ノ祖師ト
ノ三世ノ覚母タリト幸ニ同国米沢龜岡ノ大聖
堂ニ参籠シテ深ク祈請ヲ凝ス縁ニ任テ今年ハ
爰ニ逗留ス
一十九歳大顛遂ケ難ク心頭蒙鬱トノ瞬息堪カタ
シ臨濟宗雲居和尚慈光不昧禪師ハ別伝ノ淵源
ヲ窮メ一肩ニ宗風ヲ荷テ持律雪霜ヨリモ淨ク
慈悲行願万人ニ周フノ四方仰テ悉ク師表トス
幸ニ奥州仙臺ノ傍ヲ津野古路ト云処ニ隱遁シ

07
オ

テマシ、ケレハ盲龜ノ浮木ト心得即チ彼地
ニ到リヒソカニ柴扉ヲ敲テ五戒ヲ頂受シテ本
郷ニ帰ル

一二十歳拈華ノ旨未夕省処ヲ不得故ニ同国秋田
天徳寺堂頭和尚ノ参徒ト成テ上州白井ノ双林
寺ニ到テ掛錫ス此ニ於テ五躰投地シテ一夜ニ
三千五百礼ヲ務ム五処ノ皮肉悉クタゞレ額イ
ヨリ血少シ出ツ思ヒノ外ニ疲レタリ二三日ヲ
經テ後百日ノ火ノ物ダチヲ務ム山頭ニ諏訪大
明神ノ社頭アリ大魔吸ナリトシテ山ニ登ルモ

07
ウ

ノ古今恐レヲナスト云ヘリ某乙此百日ノ間タ
毎夜參詣ス其面影ヲ見タルモノ知リタル者寺
中ニ一人モナシ家郷ヲ離テ弥父ノ困窮ヲ想像
シテ悲ミ骨ニ徹ス既ニ家伝ノ田地相應ノ家財
等ヲモ以前ニ沽却セシナレハ今ハ何ヲ以テ
カ活命ノ便リトセン我等トハ遙ニ隔リ居レハ
言語ノ助ニモ誰ヲカ憑ン我ナクンハ何ニカ依
ラン蒼天々々岡極報ヒ難シ悲哉々々如何ニモ
ノ少分ノ孔方兄ヲ得テ責テハ彼田地ヲ買返ノ
是ヲ以形骸ヲ養ハサセ一時ハカリモ世上ノ苦

08
オ

ヲ拔除ノ命終ノ期ヲ待セタク思イ沈テ千變万
化点塵ニ身ヲ碎クトイヘ陀半文モ得ル処ナシ
終ニ衣鉢卧具等マテヲ賣却セシカ何ノ助ケ
ニモ不足弥悲哀休カタク遠想弛マスシテ直チ
ニ武州江戸ニ上リ或ハ朝夕鉢シ或ハ路辺ニ
彷徨ノ施餓鬼ノ供ヲ設ケテ諸人ノ施シヲ受或
ハ人ノ望ヲ待テ經帷子ヲ書写シ或ハ奴僕ノ形
ヲマネテ賃ヲ取リテ米ヲ舂キ無尽ニ身ヲヤツ
シテ泣々黄金三兩ヲ貯ヘ儲タリ是即崑山ノ片
玉ト喜ヒ急ニ家父ノ方ニ贈リ遣シ是ヲ一世ノ

08
ウ

根柱トシテナニ篇ニモ此世ヲ暮サセ玉ヘ臨終
ノ一念必ス乱レ玉フナ某乙元来大顛アリ此ヨ
リ以後ハ半銭モ扶助ナリカタシト懇ニ書封ヲ
調ヘ言語ノ限り老懷ヲ慰メ一念菩提心ノ発起
センコトヲ勸ム於此愚子カ心モ聊カ安シ遙カニ
陳蒲鞋ノ故事ヲ追念ノ不覺痛ク緇袂ヲ濡ホセ
リ
一二十三歳同志ノ僧某乙ニ告テ曰肥前国道者禪
師ハ近世道得相脩ル明眼ノ宗師也其上足下聞
ヤ隱元大禪師トテ異国ノ高僧来朝セラレ著岸

09
オ

近日ノ際タニアラント顔クハ足下モ我等ト一
列ニ異僧ニ参シテ西来ノ宗源ヲ探リ見ン_一豈
ニ大望ニ非スヤト某乙是ヲ聞テ惘篤謝シ難ク
旧識ハ是愚子カ為ノ賣餅ノ老婆ト歡踊措ク所
ナシ道者ト隱元トハ譬ハ日月ノ並照カ如シ然
ハ則某乙如何ナル無始ノ極暗ナリ任争テカ一
タヒ晴サルヘケンヤ忽チニ江戸ヲ発シテ海陸
数千里ヲ陵キ辛酸ノ先備前刃ニ到リ二月某日
国清寺ト云臨濟家ノ寺院ニ入日月二年ヲ徑歴
ノ諸方ノ教風ヲ窺イ聞ク

09
ウ

一二十四歳重テ又倭後州ニ渡リ臨濟宗安国寺仁
山和尚ノ会下ニ到テ暫ク掛錫ス
一二十五歳隱老ノ未朝必乏近ニ有_在ト四方ノ群口
日々ニ喧動ス是故ニ星槎ヲ浮メテ肥前ニ渡ル
即チ長崎ニ至テ道者禪師ノ会下ニ帰依ノ同参
ト共ニ隱元老師ノ著津ヲ待ツ今茲秋七月六日
老師著岸ス肥之前後兩州ノ男女老少路傍ニ羅
拜シ僧俗貴賤堂上ニ双迎ノ直ニ東明山興福禪
院ニ安座セラル因テ同参ト相伴フテ隱老師ノ
会下ニ掛錫ス嗚呼悲哉宿障逼ノ来ル故カ某乙

10
オ

不意大病患ヲ感受ノ朝参暮誨全ク進ミカタシ
遺憾胸ヲ裂キ追悔身ヲ纏フテ種々ニ療保ヲ加
フトイヘ_一吒聊カ驗ナシ神魂迷乱ノ会下ヲ辞シ
去リ同州佐賀ノ城下ニ一人ノ旧交アリケルヲ
窘歩ノ尋ネ行テ此ニ病悩ヲ養フ

一二十六歳旧痾未夕痊ヘス昏惑増ス重累ノ泣々
武州江戸ニ帰テ藥療ヲ業トス

一二十七歳病悩不除色力日ニ随テ衰減ス如此ニ
テハ存命難測覚テ即チ家父ヲ帰省シ最後ノ對
面ヲ遂ケン為メ白ラ病身ヲ助ケテハル_一羽州

10
ウ

ノ旅ニ赴又長途茫茫曠野漠々我影ヨリ外ハ誰
ヲカ友トセン白雲飛下ニ白頭ノ親安否如何ン
心ハ飛立カ如クナレ_一徒歩進ムニ力ナク旅館
無人暮雨魂ト打吟シ夜ヲ重ネ日ヲ積ミ辛フ_一
故園ニ到リヌ思ノ外ニ父老衰ノ明日ヲモ期セ
サル躰ヲ一見ノ_一弥胸間相塞リ歎息スルニ堪タ
リ
一二十八歳大顛未タ一点企チ起サス如此ノ終ニ
死門ニ起カン_一其悲ミナニ、カ比況セン身ヲ
鑊湯ノ内ニ仰キ地ニ伏ノ身骨ヲ点塵ノ重テ又

11
オ

謹テ丹禱ス尽虚空尽大地ノ三宝ヲ始メ奉リ三
界趣中ノ天衆地類一分護法ノ功德ヲ具スル一
切ノ世天龍尊八部主 我本朝域中大小ノ神祇
等至心ニ顛クハ今此大病ヲ速疾ニ蠲除ノ年来
ノ懇求一箋半卷ナリト云フ_一吒其幹事ヲ起サシ
メ玉ヘ弟子カ寸心ハ各々ノ内鑿ニ任スルモノ
ナリ護法利物ノ本顛ハ三世ヲ尽ノ各々ニ荷負
シ玉フニ非スヤ独リ弟子ニ_一ヲイテ其誓ヒ豈ソ
レ薄スカランヤ弟子又一点不疑愚意最モ怙ミ
アリト昼夜睡眠ヲ禁遏シテ已ニ数日ヲ重ネヌ

11
ウ

然ル処ニ夏日ニ霜ヲ降セシタメシトヤイハン
迅風ノ雲霧ヲ掃フカ如ク旧悩一時ニ悉ク除尽
ノ四支百節以前ヨリハ猶勁剛ニナリヌ喜踊ト
報謝ト二箇一身ニ滿チ溢レテ手足ノ振舞ヲモ
不覺時々食味ヲモ忘却セリ此ニ於テ國中群口
ノ唱フル処ハ殊域ノ高僧撰津州富田普門寺ニ
進山ノ_一恢イニ断際無多ノ宗風ヲ扇揚シ棒喝群
機ニ_一円應シ一句ニ海ヲ傾ケ_一湫ヲ倒シテ龍ノ水
ヲ得タルカ如ク彼欽一ノ_一徑山ニ出世セシニ相
似タリト愚子静ニ此ヲ聞テ襟懷慶快ノ卒然ト

12
オ

ノ鞋ニ秣カイ杖ヲ呼テ速ニ家郷ヲ出ツ吟囊ニ
月ヲ貯ヘ破笠ニ雨ヲ陵テ風浪露宿ノ孤身北陸
道ヲ經テ竟ニ普門ニ到リ再タヒ隱老子ノ膝下
ヲ拜ス鶴鳴天ニ響テ老子ノ道徳

上聞ニ達ノ伽藍地ヲ宇治縣大和田ニ下シ賜リ
テ爰ニ開山ノ祖トナリ山ヲ黄檗ト名ツケラレ
玉又此間普門ニ追隨シ檗山ニ酸楚ノ一起一卧
一争ノ了畢ヲ以一念トス近属又相次テ即非禪
師長崎ニ著津アリケルト聞テ是即チ幸ナル哉
ト思ヒ徒行ノ浪速津ニ到リテ小舟ヲ賃備ノ海

波万里孤帆一片打雨喝風ノ惶々トノ即非ノ門
ニ入テ一著ノ示誨ヲ蒙ル此際艱難苦行スル
既ニ七年ノ寒暑ヲカヘタリ愚子宝刀ヲ頂戴セ
シ本師即チ示スニ趙州一字ノ無ヲ以テセラ
ル未著衣喫飯刹那ノ間斷モナク此事ヲ以テ千
万ニ工夫ヲ費ストイヘトモ心胸未タ明ラマス
漆桶今ニ破レス或時ハ偏ニ此ヲ悔ヒ悲テ終夜
哀涙ヲス、リ或時ハ深淵ニ身ヲ沈メンカト思
ヒ或時ハ高山ニ走セ上リ四躰ヲ投ケンカト思
ヒ身命ノ限りハ此ヲ尽シ見ルトイヘ氏弥狂惑

13
オ

ノ弥昧蔽ス

一三十三歳病惱療治ノタメ且ツ志ス事アリテ撰
州ノ有馬山ニ湯治ス夫以某乙カ一身ヨリ沙界
三千六道四生ノ一切ノ蠢動ヲ顧レハ伊音那辺
ヨリ樓至仏ノ劫ヲ尽マテ生々世々流轉沈淪一
息モ断ユルヲナシ吁此ハ是果ノ何ノ所以ヤト
考ヘ思ヘハ全ク更ニ他事ナシ畢竟只是一箇ノ
無明煩惱ノナスワサナリ其煩惱ノ数品ハ河沙
モタトヘニ非ストイヘ氏生死輪廻ノ根元ヲ相
究レハ決定一種ノ婬欲ニ撰歸スルモノナリ是

12
ウ

13
ウ

以諸仏ノ嚴誠専ラ此ニカ、レリ殊更欲界ノ名
ハ此物ヨリノ得タルニ非スヤ又其根元ヲ推シ
究レハ至極ニ根ニカ、レリ然レハ則チ某乙ニ
於テハ此事省悟ノタメニ一芝此一根断切スヘ
シト然レトモ又細行ハ却テ大乘ノ為メニ障リ
ヲ作スト聞ケハイカ、ハスヘキト種々ニ沈思
ノ且夕ヲ送ル或夜一念忽然ト發起ノ是非ノワ
キマヘモナク只一時ニ切り断チ捨テヌ其疵養
生ノタメ五十日ハカリ入湯ス其レヨリ後ハ妄
念惑性モ漸々微薄ニナリ行ヲ覺ヌ

14
オ

一三十四歳去年長崎ヨリ帰テ又黄檗ニ参ス正月

某ノ日老子ヲ辞シ去リ又此ニ於テ某乙歎息ス
ラク今年癸卯ハ昔シ唐ノ義浄三藏帰朝セラレ
テ奏聞ヲ徑テ数百卷翻訳事始メノ年ニ非スヤ
其年代異トニ国土隔リ殊トニ賢愚大イニ違ヘ
リ然リトイヘトモ弘伝ノ大心ニ於テハナンノ
異同ヲカ論センヤ彼此全一ナランモノ也ト決
思ノ是ヨリ直路ニ撰津州勝尾山ニ上リ到リ一
七日夜円通閣ニ参籠シテ日夜一心ニ尊軀ニ帰
命シ奉リ南無大慈大悲自在尊仏証知証明シ玉

14
ウ

へ某乙今一身ニ於テハ寸骨分筋ニ至ルマテ一
塵モ全ク惜ム所ナシ情ヲ自巳ヲ省レハ如此夙
障深厚ニシテハ一生大悟ノ念ハ思ヒ果ヌ然レ
ハ彼藏經ノ頌樂ヲ一生ニ生ノ間ニ決然トノ成
就セサセ玉ヘ大悲ノ神通ニハ何ノ求カ円滿セ
サランヤ悲母一子ノ弘誓ヲ至念スルニ随テ夜
モ漸更行キ燈明ノ影ホノカナル下ニ昔シ数多
ノ古徳ノ火投身飼虎啖蚊等ノ捨身ノ難行ヲ
追念スレハ感歎骨ニ透リ一分モ及フヘカラス
ト思惟スル俛ニ倏焉トノ座ヲ起チ即チ左ノ小

15
オ

拵ヲ扣キ碎キ油布ヲ纏卷ノ仏前ノ燈火ヲ移シ
放テ爆然トノ一拵ヲ焼却ス傍ラニ同侶ノ出家
七人アリ般若心經二十一卷読ミ終ナハ吹キ消
シ玉ヘト相約ス某乙ハ線香ヲ炷イテ右ノ手ニ
握リ左ノ手ヲハ堂ノ格子ニカラメ付ケテキタ
リ火ヲ放ツテ後ニハ茫然トノ痛熱ヲモ覚エス
後チ見レハ左ノ手ハ皮タ、レ血少シ出ツ因テ
顛書ヲ封ノ堂内ニ納ム其趣キハ謹ンテ仏制ヲ
守リ奉リ非律ノ行一世ノ間タ犯シ行スヘカラ
ストナリ凡ソ八九箇条ナリ此ヨリ和州ノ長谷

15
ウ

ニ上リ此ヨリ洛陽清水寺ニ上リテ參籠ヲ凝シ
拵燈読誦顛書等ノ三箇ノ事ヲ三箇所全同ニ相
勤メタリ此両所ニハ同侶ノ人ハナシ其忍痛ニ
於テハ同行ノ人々憐察セラレヨ茲歳又多賀大
明神伊勢兩宗廟ニ參拜ス神明々カニ聞シメセ
某乙カ求顛アハレ今生ノ間ニ功ヲ遂サセ玉ヘ
万古冥驗ノ新ナルヲ聊カ曾テ疑ハス若某乙
旧善少クノ此生ニ遂功ノ便リナクンハ頓ニ某
乙カ命根ヲ殺斷ノ再生ニ一タヒ成就セサセ玉
ヘ殺活共ニ利物ノ道ナリ一々照覽ニ任ス因テ

16
オ

顛書一篇ヲ相調テ此ヲ社頭ニ奉納ス
一三十五歳大顛成就ノ為ニ十方ニ奔走シ洛ノ中
外ヲ徘徊シ關東ニ馳下リ奥羽ニ飛ヒ下リ貴賤
男女有髮無髮奴婢老少ヲ敲キ微塵ハカリノ助
力ヲ憑ミ驗ム如此ニ辛苦ヲ尽ストイヘトモ事
ハ大イニ助ケハ少ケレハ此分限ニテハ必之
争カ顛ヒヲ果サン然ラハ如何センヤト自ラ心
ヲ逼ゾ千思万慮ノ工夫ヲ費ス然ル処ニ去年炷
セシ一拵旧痕俄ニ再発シ大イニ潰爛シ苦痛更
ニ堪カタク実ニ悲カナ大顛ノ故障ニハ此ヨリ

16
ウ

重キ物アランヤ修善ノ家ニハ必ス天魔窺フト
ハカ、ル事ニヤト心身ヒトリ狂倒ス時ニ江戸
松平莊九郎殿ノ宅ニ逗留ス或夜悲歎ニ伏シ沈
ミ肱ヲ枕トシ打マトロム処ニ夢ウツ、ノ際タ
ニ異人現前ノ某乙カ名ヲ呼ヒ醒ノ面前ニ相告
テ曰汝カ顛行末法世中ニハ実ニ希有ナルモノ
ナリ我汝ヲ憐テ暫クモ離レス其痛処ニハ此藥
ヲ貼ケ用イヨトテ其一味ヲ捧ケテ手ツカラ授
ケ玉フ又明カニ其藥名ヲ示サル某乙夢中ニ奇
妙ノ事ナリト思フテ仰テ其姓名ヲ問ヘハ我ハ

17
オ

是肥州長崎南京寺興福禪刹ノ開山如芝ナリト
云リ夢中ニ念スラクハ本結大因トハ是ニヤア
ラマシ一世ニハ終ニ面參ヲ遂サル処ニカ、ル
不思議ノ冥驗過去ノ程ソ有難タカリケル一夢
驚キ醒テ神魂恍惚トノ実虚未タ粲然タラス夙
ニ起テ面手ヲ盥洗シ法衣ヲ著ノ肥前ニ向テ謝
礼数ヲ尽ス冥感豈夢ナランヤト忽チニ其藥味
ヲ求メ示現ノ如クニ驗ムル処ニ拵端迅速ニ痛
ヲ忘レ傷爛日ニ随テ跡ヲ掃テ愈ヘタリ実ニ不
可思議ノ不可思議ナリト感謝是ヲ尽スニ物ナ

17
ウ

シ素顛休マス又諸方ヲ驅馳ノ弥勸化ヲ励マス
カ、ル処ニ一月ハカリ程ヘシニ又男根ノ截痕
忽チ発リテ痛爛拵癩ヨリハ大イニ増セリ此ニ
於テ精神究リツキテ万事ヲ放下ス実ニ一難タ
マニ遁レ出レハ一難跡ヲ追テ逼メ来ルイカニ
未盡ノ酬因感果ナレハトテ如此ハアルヘキモ
ノカハト昔ヲ歎キ今ヲ恨テ坐口ニ喪身失命ス
日夜茫然トノ寤寐モ安カラサル処ニ或夜又如
芝和尚現シ来テ了翁了翁懼ルヲナカレ歎ク
勿レ恨ルヲ勿レ悔ムヲ勿レ十方ノ諸仏諸祖四

18
オ

方ノ天神地祇汝ヲ衛護ノ一瞬モ歇マス汝知ル
ヤ松柏ハ雪霜ノ後ニ貞節ヲ呈ハシ蓮花ハ淤泥
ノ中ヨリ精華ヲ吐ク弥勵ミ弥昂ヨ其痛根ニハ
汝カ尋常ネ相知ル処ノ藥方ニ此一味ヲ加ヘテ
早ク用ヨ神効日ヲ待シト直チニ金色ノ手ヲ以
テ錦袋ノ中ヨリ一味ヲ取出ノ万痛ニ万飴丸ナ
リトテ明カニ授ラレ玉フ其藥味ハ即チ以前ニ
授ケ玉フト全ク一物ナリ某乙愕然ト崛起ノナ
ニノ所思モナク感泣衣ヲシホリ滿身汗流レテ
霧中ニ海ヲ渡リ暗夜ニ路ヲタトルカ如ク何国

18
ウ

トモ心ノ行ク方ヲ知ラス翌朝ニ至リテ日ノ東
方ニ出ルカ如ク漸ク眼明キ心開ケテ希有ナル
カナメカ、ル神變古人ハ知ルヤ古ヘモ未タ聞
カス以前ノ不思議ハ今却テ不思議ナラス言語
道斷現リニ記得ス愚子カ曾テ覺知スル所ノ藥
方トハ静ニ案スレハ昔シ某乙ヲ助テ出家ニセ
ラレシ加州ノ流客此ハ是妙方ナリトテ伝授セ
ラレシ一方アリ思フニ只此事ナルヘシ筒ノ外
ニハ更ニ知ル処ナシ直ニ旧方ヲ調劑ノ灵夢ノ
一味ヲ加ヘテ示現ニ任テ点用セシカハ忍痛夢

19
オ

ノ醒タルカ如ク跡ナク旧傷雪ニ湯セシカ如ク
時刻ヲ待ス奇妙ノ餘リ試ミニ服飲セシニ氣力
忽チ倍勝シ五臟渾テ潤和ス又試ニ他人ニ惠メ
八十人ハ十快シ九人ハ九快ス尊信心碎テ至謝
最モ一分モ尽スアアハス某乙今ニ至テ滿身
病トシテハ一点モ不覺胸宇快活トシテ夙恨塵
ヲ掃ツテ跡ナシ曩時病籠貝闕ノ秘方ヲ南山ニ
捧シハ苦ミニヨリテ助ヲ受ケ今某乙ハ助ニヨ
リテ苦ヲ抜ク縁ハ聊カ前後スレトモ利益ハ
古今一点不違愚子此ニ於テ大願成就ハ決然ナ

19
ウ

ルモノナリト預メ憶得ノ精神ノ進ミ行フ鵬翼
ノ夙ヲ受車輪ノ坂ヲ下ルカ如ク誰カ力カ引テ
扼メン今江戸ハ天下ノ都会ニシテ国家ノ盛事
ハ此ニ尽セリ因テ彼藥ヲ調合ノ諸人ニ賣与
セント思フ故ニヒソカニ淺草ニ到リ静ニ觀音
堂ニ通夜ノ慈眸ノ哀顧ヲ仰ク因テ彼方ノ藥
名ヲ乞ント思ヒ万飴丸ト錦袋円トノ二銘ヲ書
分シ百念百拜百回闔トリ探ルニ毎度錦袋円ナ
ラスト云ナシ即チ一決ノ方号ヲ乞ム今ノ銘
是ナリ

20
オ

一三十六歳城下ノ億万戸ヲ扣テ助ヲ乞トイヘト
モ因縁未熟時節未到ノ故ニヤ素懷ニ協カタシ
此ニ於テ一心ニ思惟スラク此錦袋円前々ヨリ
今ニ至テ其効驗ヲ試ムルニ惠ムニ随テ万病ニ
万飴ヲ吐キ百人必ス百愈ス然レハ則チ此藥ヲ
賣却ノ此價ヲ以愚顛ヲ果サント此地ヨリ四方
ニ及ヒ近ヨリ遠キニ鬻カハ争カ慶讚ノ期ナカ
ランヤ然トイヘト自巳ノ臆案仏智ノ灵鑒甚タ
恐レ多シ因テ故旧松平隼人正殿ニ評断セシ処
ニ故旧無然トノ詈誡ノ曰ク足下ノ本願善根ノ

20
ウ

一種ナリトハイヘト分外ノ作務ハ曩祖ノ誠ナ
キニ非ス其上釈氏ノ門ニハ商估ヲ不聴只勞ノ
功ナキノミニ非ス却テ佛法ヲ汗濁センハ專
ラ此ノ一舉ニアリ若非法非律ヲ以善根ヲ修セ
ハ天魔ニシテ仏事ヲ行フニ豈ソレ異ナランヤ
不如外息諸縁内心無喘寂默恬焉トノ我道ニ入
ンニハ我正念々曾テ足下ノ為メニ切ニ悲ムト
某乙諦ニ聴静ニ思フテ先故旧ノ篤実ヲ心謝ス
然リトイヘト某乙カ元吉聊カ故旧ト違ヘリ此
ニ於テ某乙カ心未タ一乞セス故ニ故旧ノ舎兄

21
オ

莊九郎殿ト評談ス莊九郎殿申サレテ曰ク隼人カ辯更ラニ道理ナキニハ非ス然リトイヘトモ若シ左様ノ助ケナクンハ争カ大顛ヲ成就スルヲ得ンヤト因テ某乙久シク愚慮ヲ廻ラス処ヲ伸テ曰ク若其レ本分ニ依ラハ何ヲカ善トシ何ヲカ惡トセン畢竟無ニシテ無ノ名モナシ不可得モ又不可得ナリ若又建化門ヲ開カハ何ノ作業トシテカ功德ナラサル今且ク臆説ヲ吐露セシ夫諸仏ノ三世ニ出世シ諸祖ノ十方ニ應現シ菩薩ノ万行ニ乘ノ觀修乃至上天ノ雲行雨施シ

21ウ

テ万物ヲ和育シ必懺懺舜ノ天下ヲ平治シ禹稷ヨリノ苗侯陳平ニ兼ネ及ノ革代ノ諸臣各大功ヲ万代ニ伝ヘ孔門ノ仁義老子ノ虚無諸子百家別立一義此等ヲ筭ヘ舉テ詳ニ其行跡ヲ考ヘ思ヘハ一々別々悉ク皆其所能ヲ賣却ノ世ヲ濟ヒ物ヲ導クニ非スヤ大凡賣門ヨリノ万法ヲ見レハ塵々箇々賣品ナラスト云コトナシ一門如此ナレハ一切門モ亦復如是忝羅万象一法所印童子ノ戯レニ川アソヒスルモ豈実相ヲ出ンヤ治生産業は何モノソ觀音大士ハ諸慾門ヲ以テ苦

22オ

提道ヲ開キ火頭金剛ノ悟入ハ老人ノ練熟スル処ナリ我今東方ノ瑠璃光如未西漢ノ神農氏ヲ以テ正嫡本祖トセン市上ニ魚肉ヲ提クルモ了事ノ凡夫ニアラスヤ作用是性我只賣藥セント老人明ニ聽テ一笑シテ相告ラレテ曰且ク汝カ好ム所ニ任スト此ヨリ胸間明決ノ即チ東山ノ麓歎荷ノ側ラニ市店ヲ仮借シ阿姪ヲ誠メ勸メテ賣客トシ某乙ハ賣主トナリヌ如此ノ四方ノ求メ未ルヲ相待ツ際其始メハ纔ニ六七人ナレ氏後ニハ日ニ随ヒ月ヲ追フテ漸々ニ倍数ノ

22ウ

十人ヨリノ八九十人ニ至ル年々増加ノ店前踵ヲフム此只恰モ龔氏カ門前ヲ觀面ニ見ルカ如此此ニ至テ愚子カ大歡争カ筆紙ニ尽シ一賣一粒コトニ諸仏諸祖觀音大士如芝齊藤ノ神護鴻恩ヲ感戴ノ刹那モ忘レス此際夕群口ノ毀譽妨難其喧キト城下頗ル響カ如シ愚子鑽レハ弥堅ク穿テハ弥実ノ四方八風悉ク其吹ニ任ス如此ノ今茲ヨリ庚戌ニ至テ六年ヲ歴ル処ニ不凶ニ黄金已ニ三千兩ヲ得タリ今大顛立トコロニ満足スルニヨリテ即チ三百兩ヲ分チ投テ林氏孝

23オ

宿信郎ノ藏ス所ノ七千餘函ヲ求メ得タリ是全ク莊九郎殿ノ一言ヨリ此ノ功ヲ遂ケタリ其外莊九郎殿御恩ハ莫大ニ蒙レリ肥前ニ下ル路用黄檗普門寺ニ住居ノ草鞋錢悉ク彼御人ノ助ケナリ今ニ至ルマテ御懇意替ラス黄檗帰依孝石居士ト申スハ此御人ナリ一四十一歳国家千万人ノ恩ヲ受テ大顛此ニ円満ス某乙カ快意諸人相共ニ推シ量リ玉ヘ無始ノ旧障モ聊カ消滅シヌト覺ラレタリ黄金分ニ過テ大イニ貯ヘ抱ケリ今此上ニハ此全部ヲ安置

23ウ

シ奉ルヘキ土地ヲ求ン為ニ府上ノ四方ヲ歴覽スルニ東叡山ハ慈眼大師ノ開基ニノ府上第一ノ崇岡ナリ群林蒼々トノ丹青ニ映シ朝曦煌々トノ金城ニ輝キ夕月高藍ヲ照シテ眼界更ニ朗廓タリ只帝都ノ本峰ヲ写シ出スノミニ非ス殊方ノ四明モ又此ニ動キ来ルカ如シ天下ノ崇仰諸山ニ超出ノ台教盛リニ唱揚ノ諸院ノ輪奐人目ヲ炫ス山下ニ湖水アリ波瀾渺漫トノ白鳥馴游ヒ金鱗戯レ躍ル湖中一面悉ク連

24オ

花ニノ紅白彩雲浮フ昔シ智者大師一代十五部ノ写点ハ万州皆是ヲ称歎ス其事縁ト景象ト此地ニ及フハ是ナシ是故ニ秘カニ便リヲ其院ニ求メ其主ヲ憑テ愚志ノ大概ヲ遙ニ

日光御門主ノ聞ニ達シ奉ル 御門主甚タ感歎セサセ玉イ慈恩周ク蔭ヲ即チ申シノマ、ニ下シ賜ル感荷心肝ニ堪奉ルモノナリ此ニ於テ湖中ノ地形ニナルヘキ処往来ト居住トノ便リヨカラシ方ヲ見立毎日数百頭ノ人脚ヲ賃備メ土砂ヲ以瀦水ヲ填塞ス自身モ石ヲ負ヒ土ヲ荷フ

24
ウ

地形漸ク就ンヌサテ又大石小石ヲアツメテ四方ニ石垣ヲ疊ミ築ク凡ソ四方十五間ナリ高下少キ二壇ニ分ツ湖中ニヲイテハ第一ノ深キ処ナリ因テ先小堂一字ヲ建立セシメ彼蔵典ヲ安置シ奉リヌ此ニ於テ某乙又一顛ヲ企チ起ス録外ノ仏典倭漢ヲ相兼ネ儒門老莊百家經史子集古今ノ群書医道ノ諸策
本朝ノ書ニ於テハ上古ヨリ近代ニ至ルマテ神書歌書記録此等ノ万卷悉ク是ヲ求メ別々ニ其文庫ヲ修造ノ是ヲ收メ置キ傍ラニ勸学寮ヲ建

25
オ

立セント励シ勗ム大顛十二七八ハ功ヲ遂ケタリ此ニ於テ志ス所アリテ即チ洛都ノ慧日山東福寺ニ登リ常樂ノ祖廟ヲ拜シ奉リ此ヨリ普門ニ入りテ首座ニス、ミタリ方丈ニノ戒臘ヲ沙汰セラレ即チ单寮官ニ任セラル

一四十二歳今年ハ湖中新築ノ上ノ壇ニツイテ本經蔵堂ヲ修營ス即チ横ハ三間ニ堅ハ五間ニ階作ナリ中ニ輪蔵ヲ設ケ其左右ニ書棚各四架ヲ造リ棚ハ各四重ナリ又堂ノ四方ニ棚ヲ作り運ラス共又各四重ナリ此ニ於テ彼小堂ノ全部ヲ

25
ウ

此ニ改メ遷シ奉ル者也サテ又身骨ヲ碎キ大顛ヲ挿ム故ニ逆ノ文庫二字ヲ起立ス各縦横二間ニ三間ナリ二階ヲ設ケ四方ニ書棚ヲ作り渡ス棚ハ又是各四重ナリ已上三字共火難ヲ除カンカタメニ屋上四方銅ヲ以テ包裹ス彼如芝禪師異国ノ徑山寺ヨリ将来ノ三聖人古銅ノ佛像不思議ノ因縁ニヨリテ求メ得テ此ヲ即チ本尊トシ堂中ニ安置シ奉リケル如此ノ退テ謹テ群書弘求ノ時節ヲ相待ツ者也第一ノ大顛ハ已ニ功ヲ遂ケ終ル因テ十方ノ諸仏諸祖一功ノ諸天諸

26
オ

神如芝禪師齊藤氏等一分報恩ノ為メ受業親教ノ師家父母親族昇進道果ノ為メ天下国家ヲ始メ一分恩分ヲ蒙リ彼ノ灵藥買取ノ千万人常住安穩ノ為メ藥方効驗ヲ呈シ藥恩一分報謝ノ為メ此錦袋円ヲ四十二万人ニ施シ惠ント念顛ヲ起シ即チ勢州上野村安養寺ノ門前ニ小キナル施藥所ヲ建立シ 太神宮參詣其外往来ノ諸人ニ施行ス其後洛陽泉涌寺門前黄檗門前ニ於テ施シ与ヘテ凡ソ五万六千裏ヲ出シ遣ハス此後ハ又文庫ノ營事ニカ、リ其暇ナキニヨリテ

26
ウ

此施ヲハ今暫ク止ツ尚滿顛ノ志ハタユマサルモノナリ
一四十三歳今年ハ湖中ノ築地ニ文庫四字ヲ造立ス南北ノ二屋ハ二間ニ五間西一方二庫ハ二間ニ三間ナリ然ル処ニ不慮ノ横難出来ノ此四ノ文庫一時ニ是ヲ崩壊ス事已テニ成ラントスレハ如是ノ凶ニアヘリ五穀成熟ノ時悪風雨トハ是ナランカ然トイヘ氏某乙大顛ノ本志ハ一点モ撓マス弥ヨ激スレハ弥ヨ進ム五百ノ嶮難ヲ經スハ何ソ宝処三昧ノ安樂ヲ得テンヤ某乙

27
オ

仏種ノ断絶ヲ痛ミ悲此相続ノタメニサスカニ
氏族モ卑賤ナラサル人ノ子ヲ数多所望ノ出家
セシメント撫育ス是又種々ノ故障アリテ本意
ヲ不遂此上ハ府上ノ棄子ヲ拾イ集メテ不絶ノ
元志ヲ達セント思ヒ入十一人ヲ得テ種々苦勞
ス其父母ハヤル方ナク悲シカルヘケレトモ力
ナクテコソト思ヘハ現在一分ノ利益ニモナリ
ヌヘシ湖中ニ以前ニ建立セシ処ノ二字ハ破壊
ニ及ハスツ、カナシ此ニ於テ某乙弥ヨ志シハ
ケミ進ンテ仰顔クハ一代ノ中ニ此一蔵ト今ニ

27ウ

蔵ヲ造立シ三箇所ニ三蔵ヲ納メヨカマク欲ス
ルモノナリ
一四十四歳勸学寮建立ノ本意ハ域中有縁無縁道
俗老少各内典外典披覽ノ望有之諸衆各其志ニ
随テ其意願ヲ遂シメントナリ此一事ヲ以テ我
一事了畢ニ廻向セン然モ生々世々三宝値遇空
シカラサラントヲ冀モノナリ此ヲ以テ浪生処
処ノ嘆ヲイサ、カ休ントテモ朽壞スヘキ此身
ヲ以テ仏法ニ投チステント願シキニアラスヤ
タマク我ニ同シキ人々又ソレ誰ソヤイヨク賣

28オ

藥ノ勸学寮修補ノ助ニソナヘヲキ披覽ノ人々
ノ粥飯ニ供セント一刹那怠慢ナクハケマシ務
ルモノナリ

一四十五歳当府銀臺ノ靄雲山瑞聖寺ハ黄檗山木
菴和尚ノ開基ニノ鉄牛和尚附属ノ住持ナリ大
衆モ大計ソ一千指ハカリ相集リ仏法大イニ繁
揚ス其中ニハ大蔵披覽ノ衆モアリヌヘシ是故
ニ此山ニ大顛三箇所ノ一部ヲ措マク欲シ和尚
ニ告ク鉄牛大ニ歡喜アリテ山中何レノ処ナリ
トモ足下ノ眼力次第ニ之メラルヘシ老僧モ年

28ウ

未其大望ハ懷抱ニ蘊ムトイヘトモ日月空ク過
ヌト因之山中ノ東方境致宜ク見ルニツイテ地
形ヲ築アケ牢メテ四方ニ石垣ヲ置ミ文庫ヲ造
営ス即チ三間ニ五間ナリ二階作りニシテ上下
ニ書棚ヲ四方ニ作り廻ラス相共ニ各四重ナリ
此モ亦屋上四方銅ヲ以テ纏裏ス又文庫ノ東ニ
当リテ二間ニ五間ノ一字ヲ作其中ヲ五局ニ設
ケ畧敷ニ至ルマテ相整ヘ披覽学者ノタメニ施
シ措ク是ヲ勸学寮ト名ツク
一四十六歳靄荷池ノ端ニ於テ表行七間裏行二十

29オ

二間ノ市鄣ヲ買求ム其本意ハ某乙多年大顛成
就シタランニ於テハ勸学寮院并ニ諸方文庫ノ
用途ニ便リセントナリ此ヲ勸学寮里坊ト名付
ク

大猷院殿大相国公廿五年忌大法事ノ時 御門
主ヨリ始メテ万部堂奠供ノ役人ニ命シ玉フ其
後御法事コトハ必ス同役ヲツトム
一四十八歳今年不量ルニ種々ノ妨難出未ノ某乙
ヲ寺社御奉行所ニ出サレ是非真偽綿密ニ御
評裁ヲ遂ケラレ始終一々某乙カ心行道理ニ決

29ウ

之ス因テ某乙一世ノ苦行ヲ聞シ及ハレ何モ
殊外ニ御感歎アリテ却テ思外ノ褒美ヲ蒙レリ
因ミニ謹テ未来修善ノ諸士ニ告ケ奉ル一事ノ
造興ニハ必ス千種ノ障難相逐ヒ来ル堅固勇猛
精進波羅蜜ナラテハ其功ハ遂ケ難キモノナリ
伏ノ請フ小器量ニノ容易ク半塗ニノ相止メ給
ナ△上州世良田ノ長樂寺ハ榮朝禪師ノ旧刹ナ
リ古来台密禪三宗兼学ノ寺トス此院ニ歸ノ兼
学ノ印可ヲ蒙ル

30オ

一五十一歳瑞聖寺文庫ニ畫一日録統蔵一万餘卷

ノ蔵典ヲ納ム此經ハ此ヨリ先ニ或人ヲ憑ミ御
執權稻葉美濃守正則公異国ニ仰セ遣サレン
ヲ顛フ正則公御許容アリテ終ニ此春江戸ニ到
著ス即チ唐本ナリ外ニ儒老并ニ九流ノ書大數
五千餘卷ヲ納ム因テ鉄牛和尚小參上堂ノ慶讚
アリ其後正則公大久保忠朝公此寺ニ未臨アリ
テ殊外ニ感嗟アリツルト聞ユ其翌年正則公ハ
某乙ヲ御佳召アリ鉄牛和尚ヲ相客トシテ手ツ
カラ茶ヲ点シテ賜ハル某乙大顛昼夜刹那モ敢
ヘテ間斷セス日ヲ逐イ月ニ隨テ弥ヨ勵ミ進ン

30
ウ

テ千思万慮ス此ニ不凶ニ
大相国公薨御シ玉フ 御廟殿東叡山ニ御修宮
アルヘキニ 官裁已ニ芝マンヌ依之山中四院
ノ地ヲ凶シ上ラレ其代リノ地ヲ山ノ西ニ当リ
テ別々ニ恩賜シ玉フ其隙地ノ餘リアルヲ竊カ
ニ窺ヒ見テ是偏ニ仏天ノ与ヘタマフ処ナリト
思ヒトリテ幸イニ忠朝公今般御法事ノ総奉行
ニ立チ玉フ是又幸ナリト思ヒトリ其暇ヲ相窺
ヒ詳ニ大顛ノ本志ヲ愁訴シ奉ル忠朝公一々分
明ニ聞凶サレ殊ニ御感アリテ御真実ノ仰セノ

31
オ

旨アリ某乙其恫意ノ篤実サ難有サ心肝ニ銘シ
畢ハンヌ 御法事ノ了畢ヲ相待テ頓テ当山兩
知事ノ院主ニ相告ケ相談ス兩知事モ甚タ歎嗟
アリ折節ヲ以 御門主ノ御聞ニ達セラル
御門主大ニ御感ニ思召サレ官家ニ可通ノ旨ヲ
兩院ニ命セラレ玉フ兩院謹テ官家ニ通セラル
如此ノ此間ニ營下府上ノ群口是非紛々然タリ
毀譽嗷々然タリ為レ之空ク三年ヲ斷送ス爰ニ某
乙靜カニ思惟スラク我顛意未タ仏天ニ通達セ
サルカ通達セシメハ事争カ不レ成ヘケンヤ人間

31
ウ

ヲハ可レ欺仏天ヲハ決ノ不可欺ト因テ退テ時節
ヲ相待ツ△九月某日大悪人アリテ大毒藥ヲ食
ニ入テ某乙ヲ殺サント謀ル何トカシタリケン
其膳弟子ニス、ム弟子ナニノ心モナク食シヲ
ハリテ暫クノ身心ヲ苦シミ大イニ嘔吐ス悉ク
黄水ナリ一夜悩乱シテ翌朝死シタリ程モナク
滿身歎キ斑ヲニ色付キ骨肉マテモトラケタ、
レタリ某乙毒ニアフコト先後四度毎度其大難
ヲ遁レタリ実ニ是諸仏諸天ノ極大神護ヲ蒙リ
奉ルコト鏡ニ向フヨリモ明カナリ難有レ肝ニ

32
オ

通レリ弥ヨ大顛ニ進ム

一五十三歳九月二日 官家寺社御奉行秋元撰津
守喬朝公ニ 鈞命ヲ下シ玉フテ了翁官訴ノ土
地ノ義顛ノマ、賜之旨 御門主ニ可達云々
御門主感悅マシメテ其 御旨兩知事某乙ヲ凶
シ寄セラレテ詳ニ申度シ玉フ某乙伏テ奉承テ
年久シク思ヒ絶テ有シ処ニ如是ノ 官恩感戴
感泣ニ堪ヘ奉リテ天ニ仰キ地ニ伏ノ踊躍ス某
乙一世ノ大顛決然トノ此ニ成就ス即チ四日ニ
其土地ヲ請取ル四方五十四間也同廿一日ニ先

32
ウ

手斧始メヲ致シ勸学寮局ヲ建立ス北方ハ三間
ニ五十八間瓦葺ナリ間ダニ五十ノ寮局アリ南
西東ノ方ハ三間ニ五十餘間はハ共ニ柿葺寮
ノ數皆同上東寮ニハ出入ノ門ヲ開ク南北ニ又
門ヲ設ク是ハ平生ノ通路ヲ禁ス四寮ノ隅ニ会
所各一局ヲ設テ番頭ノ居処トス四方ニ井水各
一潭ヲ堀リ置ク中ニ又二井ヲ堀ル四寮ノ四面
ハ摺リ合セノ石垣也△同十二月二十八日池端
中町賣藥所ノ勸学屋類火ニ逢テ悉ク燒失ス土
蔵ニ火入テ多年求メ置ク処ノ儒仏道倭漢ノ書

33
オ

一万四千餘卷一時ニ灰燼トナンヌ

一五十四歳中町近辺ノ市屋旧臘悉ク類災ニ逢リ
其有様家財一々焼失スルモアリ土蔵ハ遁ル、
モアリ遠方近処故郷親族ノ方ニ暫ク立退クモ
アリサナキ類イハ或ハ藁薦ヲ蒙フリ雨露ヲ凌
キ或ハ葎ヲ囲ミテ雪風ヲ防クモアリ其便モナ
クテ満身悉濡レ寒ユルモアリ其食物ニ至テハ
或ハ焼クスホル米ニ泥水ヲウチ懸テソレヲモ
テ飢ヘヲ助ケ或ハ焼殘リタル餅ヲ拾フテ命ヲ
継キ或ハ飢寒ニ逼リテ伏シ倒ル、モアリ如此

33
ウ

種々無窮ニ苦惱ニセマレルモノ幾ク何万ト云
數ヲ不知又湯島天神ノ臺ニ於テハ焚死スルモ
ノ大計ソ百餘人其為^{ツラ}レ^レ躰弥ヨ至極不便ナリ或ハ
妻子ヲ失ヒテ夫トハカリノモノアリ或ハ父母
ヲウシナヒ一人孤シ子トナレルモアリ兄弟殘
リテ泣キ悲モアリ或ハ主人ニ別レテ僕從ハカ
リノ類イモアリ主人ノミノモノモアリ或ハ一
家眷屬不殘死セルモアリ其類々筆墨言語ニモ
尽シ難シ其骸骨ハ実トニ^{モユクイ}炷^{クイ}ノ如シ抑モ人間
地上ニ無量ノ餓鬼道八寒八熱叫喚ノ地獄道ヲ

34
オ

眼前ニ見ル者也如此ノ境界ニフレテ魂イモ消
入り胸モ割ケ痛ンテタヘ難シ此ノ極苦モ悉ク
自身ノ惡業感果ノ招ク処ニシテ外ヨリハ不來
此ニ於テ町ノ名主某ニ鳥目十貫文ヲ施シ家族
十人二十メ文ヲ与ヘ近処町中ノ家主タル者ニ
或ハ一二貫文或ハ三四メ文其苦惱ノ厚薄ニ隨
テ施シ惠ム処輕重ノ品ヲ分ツ是ハ自身經歷ノ
施行ス就中天神臺ノ死人ハ哀憐ニ不堪即チ其
町ノ名主某ヲ招キ其葬送ノタメ其親子一類ノ
活命ノタメ鳥目ヲ施与センコトヲ評談セシメ

34
ウ

悉ク名主ノ差排ニ任ス此レハ重キハ七貫文ニ
限り輕キハ二貫ニハ不下兩処ニ都合鳥目一千
一百ニメ文ヲ出シ遣ス又十方ニ迷イ苦シム兒
童ヲハ其親族ヲ尋ネ問テ其方ニ送り遣ス某乙
此ノ一箇ノ慈濟ハ年来ノ藥恩ヲ報シ且ハ眼前
ノ悲傷ニ堪ヘカタクキカ故也△四年以來貯ヘ置
ク処ノ金子一千二百兩ニ餘レリ即チ先ツ勸学
屋ノ仮屋ヲ作り其後ハ一向ニ拜領地ノ營事ヲ
勵マス府上大火災故ニ万物ノ買売殊外ニ高直
ナリトイヘトモ修造ノ事ニ於テハ全く不^レ慢右

35
オ

四方ノ勸学寮局ノ作事モ思ヒノマ、ニ今年成
就セシム其地ノ中央ニ經藏一宇ヲ修築ス即チ
三間ニ五間也其堂中ニ湖中ノ輪藏ヲ遷シ措ク
四方ノ壁板屋上ノ葺具其下板土代ノ柱ニ至ル
マテ悉ク銅ヲ以包裹ス其徑界ハ方十五間ナリ
其四方ニ石壁ヲ築キ廻ラス高サ一丈厚サ一丈
八尺其前ニ小門ヲ設ク其柱ハ悉ク石ナリ其扉
ハ又銅ヲ以是ヲ包メリ是ヲ此院ノ最第一臺ト
ス心ノ及フホトハ堅牢ヲ加フ其傍ラニ本業師
寶石戒師雲居兩和尚双親道秋妙光併ニ養父母

35
ウ

齊藤自得居士ノタメ五箇ノ石塔婆ヲ樹立ス城
州太和田黄檗山慧林和尚 官家謁見ノタメ
宮下得末ノ序テニ此院寮巡觀アリテ分外ニ驚
歎マシク帰峰ノ後木菴高泉兩和尚ニ羅□演暢
ヤアリケン其後三師ヨリ慶讚ノ序記等ヲ寄セ
贈ラル△当府谷中ノ法恩寺ハ日蓮宗ノ一本寺
ナリ其結構ノ高廣ナル「紺碧ノ莊嚴ナル」最
モ比イナシ去ヌル申ノ歳八月ノ大風雨ニ梁折
レ崩レテ半ハ傾ケリ住持修覆ニ力ラナクテ三
千ヲ、クレリ是ヲ一見ノ惜ミ痛ム「堪ヘカタ

36
オ

シ某乙モ大宮ノ最中ナリトイヘトモ金子五十
両贈リ遣ハス住持ノ悦ヒ限リナシ未タ一面モ
セサル此恩報シ難シト謝ヲ尽サル是ヲ本トノ
一二年ノ際タニ悉ク本ノ如ク修成セラル
一五十五歳五間ニ八間ノ勸学院四間ニ八間ノ客
院是ハ以來講師寄宿ノタメ亦某乙住居ノタメ
ナリ二間ニ三間ノ文庫二字右悉ク思ヒノ如ク
成就セシメヌ文庫ニハ三教九流百家倭漢内外
典 本朝神書歴史及ヒ記録歌書物語草子演史
医道軍書等ノ諸群簡太凡三万餘卷ヲ收藏セシ

36
ウ

ムル者也某乙十四歳ヨリノ大望此ニ至テ大半
満足ス然リイヘ斥猶開興ノ志ハ未タ不弭△
官工大仏師康乗府上ニ逗留ス幸イニ 釈迦尊
像彫刻ヲ憑ム御長ケ一尺五寸九重座莊嚴金玉
ヲチリハム是ヲ勸学院ノ本尊ニ安シ奉ル△秋
九月ニ至テ 輪王寺御門主ニ訴願シ奉ラク少
僧某乙不可説ノ 御威恩ヲ頂戴シ奉テ不思議
ノ微願ヲ成就シ奉リヌ須弥大海ヲ擧ケテモ豈
其 御威恩ニ比シ奉リ得ンヤ某乙伏望ムラク
ハ此以後永年ヲ尽スマテニ衆寮ニハ台徒数百

37
オ

人ノ学衆ヲ置キ勸学院ニ於テ毎日不絶台教講
談ノ知識ヲ置マク欲ス此師ノ資縁ニ於テハ某
乙悉ク償フヘキモノナリ且又儒書外典ノ辯談
ノ人ヲ置マク欲ス此人ハ市屋ヨリ毎日往還セ
シメン同ク扶助ニ於テハ上ト同断ナリ此旨即
チ両知事一山ニ伝ヘ宣ラル学頭両院家一山舉
リテ莫大ニ感嗟アリテ忽チ 御門主ノ御聞ニ
達セラル 御門主深ク勸喜感心マシメテ即チ
学頭陵雲院ニ般若心經ヲ講説開白セシメヨ常
陸国中館觀音寺ハ日比博識ト聞及フ是ヲ後

37
ウ

ノ講師トセヨ番頭等所化共ヲ吟味ノ彼寮局ニ
徙住セシムヘシトノ命令ヲ下シ玉フ依之学徒
二百五十餘人各番頭相副イ頓テ歎学寮ニ徙ラ
ル右ノ旨諸方ニ聞ヘ渡ルニ依テ遠近ノ寺僧老
少相集リテ六百餘人トソ聞ヘケル觀音寺常弐
ヨリ来著セラル△爰ニ某乙又一顛アリ来ル十
月十日ハ彼ノ某乙ヲ披削セシメシ齊藤自得居
士カ三十三回忌ニ相当レリ然レハ学頭ノ説法
四日ニ首起アリテ一七日ヲ經十日ヲ結願ニ当
ラレ其夕座ヨリ觀音寺開説ノ天台指要鈔ハ興

38
オ

行アリナンカシト三執行一山一同ニ弥ヨ殊勝
奇特ノ存念ナリトテ即チ其旨ニ一決ス当日四
日ノ朝聴徒尺寸ノ間モナク講院ニ列座ス少焉
アリテ学頭講座ニ臨マル其夙儀巍々焉トシテ
山ノ動キ出ルガ如シ説旨ハ賢首ノ疏ノ義ニ據
ラル開題ヨリ其辯演ノ鮮明其義味ノ審詳其声
ノ調朗実トニ一時超出ノ人表ナリ般若大空不
生ノ深意真性妙有ノ至致宛カ 日出テ長夜明ケ
天以ノ雲霧ヲ吹拂フカ如シ滿座悉ク諦聴ノ耳
ヲ澄シ感歎ノ頭ヲ傾クル者也十日ニ至テ講ヲ

38
ウ

休メラル其夕座觀音寺ノ唱揚亦是暢麗ナリ舌
端ニ波瀾ヲ翻シ声中ニ夙籟ヲ注キ始メヨリ三
諦十如等ノ妙旨歴々然タリ中後五重六即五時
八教佛乘円頓宗意明々焉タリ聴衆倦ムトヲ忘
レ宣説ノ長カラントヲ願フ翌日ヨリハ旦タヲ
説時トス某乙大歡踊ノ至諸人徧ク推測シ玉ヘ
実ニ台教繁宣ノ一場ト成レリ△先年四十二万
人施藥ノ誓願今年二月ニ果シ遂ケヌ其以後ノ
喜捨ハ更ニ数ヲ不記△某乙積年畜思スラク大
願三藏ノ中其一藏ハ畿内畿外ノ辺ニ措マク欲

39
オ

ス幸イ近隣二年未深交ノ密宗麻衣ノ老隱アリ
時々此義ヲ細話ス有時彼老隱告ラレテ曰足下
知ルヤ紀ノ高野山ハ万代不易ノ名山ナリ山中
ニ光臺院トテ昔シ 覺法々親王ノ御隱遁ノ灵
跡ニノ今猶 仁和御門主差排ニノ一山共ニ其
院ヲ推シ重ンス此地ニ一蔵ヲ置レハ連年足下
ノ素懐ノ如ク自佗ノ簡別ナク披覽ノ要自由ナ
リ足下ノ心ニ於テ如何ント某乙熟ク聞テ一々
心底ニ感通ス先ツ深ク老隱ニ謝ス畢竟此地ト
思ヒ之メテ静カニ縁熟ヲ待ツ 官家御朱印ヲ

39
ウ

改メ 賜ヘキノ 嚴命アリ 仁和御門主ヨリ
ハ真光院僧正及ヒ候人高橋良碩ヲ江戸ニ下シ
玉フテ府上ニ在留セラル彼此ヲ聞合セテ縁熟
此時ニアリト思ヒ其便リヲ求メテ会面ヲ遂ケ
其後歡学寮院ニ相招テ年来旧顔ヲ曲サニ評談
ス僧正大ニ歡喜マシメテ即チ僧正帰山ノ後ニ
御門主ノ御耳ニ達シ奉テ重テ其旨ヲ書通ス
ヘキニ裁決シヌ△勸学講院石垣柱石ハ悉ク海
野莊大夫ト云モノニアツラヘケル作事ヲハリ
テ後莊大夫心ニ感スルヤ有ケン石ニテ某乙

40
オ

カ像ヲ刺ミ此院中ニ立ラカントス此旨弟子了
觀ト内評ス其事番頭所化衆聞及バレ奇特ナリ
ト感ゾ一人モ不殘合力ノ寿像已ニ成レリ
一五十六歳某乙久シク儒講ノ人ヲ尋ネ求ム当山
車坂ノ辺ニ松田利菴ト云テ儒医通達ノ老人ア
リト聞テ滿懐ノ至リ忽チ訪イ行イテ頻リニ講
述ノ一事ヲ憑ム辞退數回ナリトイヘトモ終イ
ニ約諾相イ極マンヌ二月某日講日已ニ之リテ
爰ニ釈典ハ朝講儒經ハ夕説ニ評決ス其レ四書
ハ先聖後賢ノ明鑑タルニヨリテ先ツ大学ヨリ

40
ウ

辯ヲ開ク利菴モ又一箇ノ老彦ナリ始メ三綱領
八条目致知格物ノ聖意宋明諸哲ノ論辯二程朱
子等ノ諸言其釈談瓌々然トノ氷ノ解ルガ如ク
玉ノ鳴ルカ如シ其外五常五倫性心ノ委説忠臣
孝子乱臣賊子ノ勸懲褒貶ノ抑揚滿座耳淨ク心
戦ク聴者二百餘人ニ及ヘリ此ニ於テ某乙大歡
喜スラク十四歳ヨリ今年マテ昼夜刹那ノ間斷
モナク千苦万辛シテ二蔵ハ向キニ已ニ成就セ
シメ当院ニ收ムル処ノ經書其數三万餘卷院宇
其數三薨四方ニ百局ノ衆寮并澗六箇所聴聞ノ

41
オ

僧俗六百餘人笈ヲ負ヒ卷ヲ懷ロニ朝夕ニ往
来出入ス伏惟ミレハ勸学ノ名ヲ虚シウセス三
宝ノ相續末代憑ミアル者歟 諸仏諸祖諸天諸
神常ニ擁護扶翼ニ非スンハ如何ントノ今日ニ
至ランヤ弥ヨ仰キ弥ヨ信ス 仁和御門主真光
僧正ノ委説法務及ヒ院家侯人評決ヲ聞召サレ
御感甚タ深フノ依請マ、令旨ヲ賜ハル命意
皆某乙カ顔ヒニ 應シサセ玉フノミナラス凡
慮ノ外ニ 御褒賞ヲ頂戴シ奉ル其上ニ光臺院
留守居義高上人蔵典ヲ堅固守護シ奉ルヘシ披

41
ウ

覽ノ格式ニ至テハ不可論自佗ト御下文ヲ賜ハ
ル右件々ノ意旨一々詳ラカニ僧正ヨリ伝達シ
玉フ某乙カ感抔難有サ譬ヲトルニ世間ニ物ナ
シ此ニ於テ高野山ニ登ラント欲ノ両院家ニ御
暇ヲ請フ然ルニ一山御評斷ヤアリケン七月廿
日ニ某乙ヲ学頭僧正ノ院ニ凸シ寄セラレ難有
モ 輪王寺御門主御令旨ヲ下シ賜ハル其 御
旨身ニ餘リ慚汗滿身ニ溢レテ言語ニ絶ヌ加之
勸学坊権大僧都法印ニ任シ玉フトナリ某乙伏
ノ承リ此ニ至テ心身驚キ戦ノキ即チ席ヲ退イ

42
オ

テ思念ス某乙卑賤ノ俗種ニノ其上不才至愚某
乙カ如キハ世間ニ倫イナシ如此ノ身ニノ如此
ノ重任ヲ頂戴シ奉ルヘキトハ思ヒモヨラス三
宝ノ照覽モ恐レ多シ此上ニハ縦イ御科ヲ蒙リ
奉ルトモ辞退申シ上ヘシト此旨ヲ潜カニ僧正
ニ訴ヘ奉ル其旨一山ニ演説シ玉フ然ル処二三
執行ヲ始メ衆徒中斫化衆滿山舉テ教訓セラレ
テ曰ク足下是非ニ頂戴セラレヨ此 嚴令此重
職ハ餘人ハタトヒ競望ムトイヘトモ全ク成カ
タキトナリ足下莫大一世ノ勲業有之故ニ 御

42
ウ

宮御感ノ上台教弘通ノ大本ヲ檀興シ永代規鑑
ヲ 思凶レテ賜ル処ナリ然レハ強イテ辞退ア
ルヘキ義ニ非ス一身ノ慚愧ハ聊カ道理ニ似レ
トモ大功ノ至リ未會有將未誰カ企チ及ハント
其重語複答互イニ數回ナリ明日高野發途ノ志
アリ彼此節ニ逼リテ頂戴シ奉ル者也△同二十
一日高野山ニ首途ス因テ錦袋円ヲ四千裏持チ
貯ヘテ途中諸病人旅宿ノ亭主男女兒輩僕従等
ニ普ク惠ミ施ス伊勢參宮并ニ乞丐人ニハ必ス
一錢文ヲ添ヘ与フ山川ヲ經歷ノ終イニ 野山ニ

43
オ

登ル高祖院ハ旧縁アル故ニ此ニ一宿ノ明朝ハ
奥院 祖廟ニ拜詣シ奉ル四方高山ノ雲ニ聳ヘ
テ我々タル有様路傍古木ノ岑鬱タル為_レ躰左右
幾億万ノ大小塔婆影堂勸メサルニ自ラ無常ノ
道念感發ス御廟橋下ノ清冷タル流レ無始ノ煩
惱塵ヲモ濯ヒ尽クシツヘシ第一 祖廟ノ淳朴
殊勝サ高林蒼々トノ四面ヲ蔭イ困ミ実トニ覲
前ニ寂寞ヲ拜瞻シ奉ル廟中ニハ 祖師今ニ儼
然トノ活座シ玉フト思ハル心身蕩尽ノ五躰ヲ
地ニ投ケ敬礼數ヲ尽ス謹テ一事ノ成就ヲ祈リ

43
ウ

兼テハ父母恩吸有無ニ縁ヲ祈ル不断長明燈ノ
何万カ光リ耀キテ無礙涉入スル葦巖界会ノ無
尽円融ノ幽趣モ眼ニフレ手ニ采ルカ如シ此ヨ
リ帰路ニ赴キ直チニ 鎮守ノ神壇ニ參詣ス先
ツ 神殿ノ不_レ莊躰神代ノ遺風如_レ是コソアラメ
ト世ニ越ヘテ貴ク覺ユ其神驗新ナルト兼テ承
リ又謹テ法施ヲ捧テ黙禱サラニ餘意ナシ当壇
ハ一山伽藍ノ地ナリ先ツ大塔ノ雲ニ連リテ高
大ナルト目ヲ驚スニタヘタリ五佛内ニ輪座シ
玉ヒテ金光外ニ赫奕タリ其外諸伽藍羅列セリ

44
オ

三股ノ松碧色枝ヲ連ネテ吹ク風一キハ潔シ耳
目ノ觸ル処是又葦蔵莊巖土トモイハマホシ谷
々寺院幾何万ソヤ輪奐葺ヲ重ネ軒ヲ双フ近世
黄檗ノ禅翁時々登詣シテ異国ニモ類イナシト
歎ラル、旨聞及ヒシハ虚語ニハ非シトソ悟リ
又此ヨリ光臺院ニ至リ又境致ノ勝レタルト山
中随一ナルヘシト見ヘタリ即チ本尊弥陀如來
ヲ拜シ奉ル 覺法親王ノ御持念仏ニノ実トニ
無類ノ灵像ナリ此ヨリ專ラ宮事ニカ、ル先ツ
安置ノ地ヲ点檢スルニ寺院ノ上ノ立壇是最宜

44
ウ

シト見ヘタリ南方大イニ開ケテ朝夕ヨリ夕バ
マテ日輝ヲ受ケテ濕氣跡トヲ払ツテナシ風景
四方ニ列リ秀イテ披覽ノ輩鬱ヲ蕩カス便リニ
偻フ見樹院トイヘルハ江戸莫逆ノ麻衣老人ノ
旧縁ノ寺ナリ材木万用悉ク此院ノ僧衆ヲ頼ム
相共ニ事ヲ調ヘ心ヲ勞セラル、ト真実無ニナ
リ当山ハ寒氣他処ニハ異ナル故ニ土地ヲ堅ク
スルヲ專要トス小石々灰等ヲ底ニ入レテ盤石
ノ如クニ相似タラシム經蔵ハ末代ヲ鑿ミテワ
ツカニ九尺ニ二間ニ作ル三方ニ棚四重ヲ連ネ

45
オ

重又は又屋上四方銅板二枚ヲ重ネテ囲ラシ包ム某乙カ如キ短智ノ者此名山ニ在留シ殊ニハ永代相續ノタメニハ身ヲ苦メ難行セスハ諸天ノ神護薄カリナント思ヒ入リテ今日十八日マテ一切火食ヲ禁絶ス此ニ於テ 仁和御門主寸謝遅引シ奉ルヲ千万懍リ思フテ今日山ヲ下テ京都ニ赴ク大坂ニ至テ印鑰鉄ノ用具ヲアツラヘ置イテ頓テ御室ニ參候ス 法務及ヒ兩僧正院家侯人其外誰々ノ惴篤丁寧実トニ身ニ逼マテ忝シ暫アリテ後 御門主出座マシメテ

45
ウ

難有モ 拜謁ヲ賜リテ 御氣色殊トニ粹蕩タリ伏ノ謝相ヲ捧ケテ即チ退キ去ンヌ 御取ニ於テ恐レ多クモ 御饗應ヲ賜ル僕從カ類イニモ同儀ニ及ヘリ 御恩身ニ餘リテ痛切イカンカ言舌ニ堪ヘタリ此ヨリ直チニ有馬ノ名湯ニ赴キ前後九日ヲ經テ大坂ニ歸ル一兩日休息ノ又高野ニ登ル修築漸ク成リテ万事ノ作為別ニ難ナシ此ニ 関白秀次公及ヒ岐阜黃門秀信公ノ石塔婆光臺院ノ山上ニアリ年序ヲ經ルニ随テ兩塔共ニ顛倒ノ石輪溪ニ轉々タリ其古ヲ顧

46
オ

ミ視レハ誠ニ一世ノ名族ニシテ英雄誰カ肩ヲ比ヘキ世諦ノ變相万古如此シト心苦ミ魂痛ミ又此時幸ナリト其ノ丘壇修補ヲ加ヘ旧苔ヲ剗リ除キ古圻ヲ濯イ淨メ石輪ヲ改メ疊シテ其法号ヲ明白ニ顯ハス諸院ノ老僧住持此圃ノ一舉ヲ深ク感賞アリテ時々ノ訪過ニ預リ種々ノ贈賂ヲ蒙フル却テ罪ヲ負フテ快シトハシ難シ金光院ハ某乙カ戚里ノ旧宿坊ナリ先祖ノ某カ法名某氏族或ハ遺忘シ或ハ失却ス此圃乞顛ハ穿鑿センヲ思ヒ數回彼院ニ行テ過去帳數返考

46
ウ

ヘ見テ後終ニ尋出ノ弥ヨ当山ノ殊勝ナルヲ追感ス造修漸ク五十日ニ一々成就ヲ得タリ最モ他力ノ加ル故ナルヲ悦フ此圃ハ十六日逗留ス火食ヲ断スルハ已前ニ同シ某乙幾年カ心顛ヲ畜フ若シ三藏ノ大業成ルコトヲ得たらハ其後仰顛クハ台密禪ノ三宗ノ名地ニ藏典各七藏ヲ措イテ益ス当耒三宝ノ慧命ヲ繼カンモノナリト然レトモ其事莫大ナリ其上此興隆ハ壽命ナクテハ争カ遂溥ンアハレ命限ノ程ヲ夢中目前ニモシラマホシキ者カナト起卧動靜

47
オ

ニ諸仏諸天ニ祈リ奉ル其三藏ハ已ニ果シ得タリ今十八藏ナリト頃耒ニ至テハ頻リニ切求ス九月二十八日僕從ヲ卒イテ山ヲ下ル序テ二天野大明神ヲ拜シテ一宿ス慈尊院ハ高祖御双親ノ冥廟ノ地當耒導師ヲ封安シ玉フト承リ及ヒ又当所七社大明神ノ祭礼ハ二十一村ヨリ執行ヒ一國ノ大盛事ナリ幸ヒ明日ニ相当レリ序テ一段宜シ是ヲモ一見セント思ヒ天野ヨリ此地ニ至ル聞及シヨリ男女大イニ群集ス夜ノ宮トテ暮方ヨリ拜參スル者數ヲ不知八幡宮ヲ拜ノ

47
ウ

本社ニ詣シケレハ神主一人跪坐ス其夙情サスカニ凡ナラス謹テ祈顛ヲコラス二十九日ノ夜ハ九度山村清左エ門ト云者ノ宅ニ一宿ス今夜枕頭ニ明々白々タル御示現ヲ蒙リ奉ル夢中ノ難有サ醒後大歡抃伏惟レハ不可思議ノ不可思議也此ニ至テ決意確然トシ十八藏ノ大建立ヲ岐志志ス三十日快ク祭礼ヲ拜覽ノ示現ノ新ナル驗シヲ感通シテ墨染メノ袂ヲウルホノ直ニ京都ニ赴ク△黄檗派瑞龍禪寺鉄眼和尚本朝ニ始メテ七千餘卷ノ開板ヲ成ス故ニ此經ヲ請ノ

48
オ

十月廿八日ニ御經高瀬船ニ積ミ下シ廿九日ニ大坂ニ著津シ霜月朔日ニ馬七疋ニ駝佐若ハ駄カノ高野山ニ登セ光臺院文庫ニ奉納スルモノ也此間タ御室御侯人衆ヨリ大阪八間屋町ノ市長ニ贈リ文ヲ付ラレ路次滞リ無ラン一ヲ頼マル其文宿々ニ相達シ何ノ妨モナシ実トニ御威光ヲ感シ奉ル是ヨリ和州五条ト云処ニ行キ相知レル僧ノ寺ニ一兩宿シソレヨリ河州其山陰ニ多年旧交ノ人ノ有ケルヲ尋ネ訪ヒ暫ラク休息シテ茶話法談ナニノ隔モナク年末ノ辛苦ヲ語り尽ス

48
ウ

△五字文殊菩薩ノ神咒ヲ誦シ滿ル一一七日ニ五十萬遍ヲ限リトス如此修スル一十七歳ヨリ今年ニ至ルマテ三十九年ナリ是專ラ愚顛成就ノタメナリ△錦袋田ノ藥能神効ナル一遠近諸国ニ響キワクルニ随テ江戸中其遠国マテモ似セ藥ヲ調合シテ売却スル一幾人トモ不知其中ニ甚シキハ売却ノ童子ヲ五十人餘養フテ徘徊セシム又鄰ニ軒ヲ隔テ棚ヲハリテ売ルモノアリ有人云ク是ヲ防ガズンバ足下ノ藥ハ行クハスタレン藥若シ廢レクラバ大顛必ス破レン

49
オ

是ヲ如何ト某乙聞テ有人ノ寸志ノ誠ヲ謝ス即チ荅テ曰ク某乙大顛ノ本意ハトニカクニ諸人ヲ助ケ救ハントメナリ若シ彼輩某乙ヲ賣リテ妻子ノ便リトモナラバ本意ノ一ツナリ争カ是ヲ防ンヤ有人又曰若シ彼力藥リ人ニタ、リタラバ其科ハ足下ニ歸スヘシ荅曰ク日月ハ未ダ地ニヲチズ仰テ天ニ任スト問荅數回ニ及ビ互イニ大笑ヒノ去ル

49
ウ

貞享二年乙刃之冬

(白丁)

50
ウ